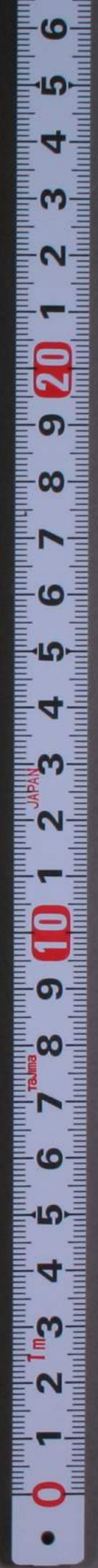


三味線志

全

洋学文庫
文庫8
A 152
1



後美事 明は廿年 甲子

●羽後能代地方の雜煮 餅ばかり多くして雜物は少
い、汁は醬油で糠干鰯のダシに仕立たるもの、餅は厚さ五
分位、長さ四寸位市二寸位の切れ二つ位を盛るが通常、雜
物は午券と惣位のものに止まる、餅は無論焼て一度湯を過
したりの(河豚生)

岩佐又兵衛 (六)

(齋藤 謙氏の談)

ソレから古代風俗の圖、是は宇和島侯が持つて
居られさすのです、其畫を見ますと慶長元和
頃の遊女の風を書いたもので、誠に閑雅な繪で
ありさす、流派から申しさすとこれは狩野に屬
して居りさすかな、風俗人物の繪、屏風です、是

は關君の所藏でありまして、彦根屏風と同じ圖
であります、唯私が見ます所では筆の強い柔い
があり、彩色に厚い薄いがあり、紙の大小があ
り、金箔を用いたと用いたの違がある、さう
云ふ所からして是は彦根屏風の寫しではないか
と私は想像して居るのであります、少年調馬の
圖、是は博物館の御藏品であります、十二幅に
なつて居りさす、能く考へますには是は元屏風
になつて居りさしたのでございさすしよと思ひ
ます、其書き口は中々強い筆で、彩色が大變に
厚い、丁度慶長頃の風を書いたものであります
其馬に乗つて居る様は千態萬狀名状すべからさ
る様が書いてあります、一體が狩野風の繪で
ありまして私が獨斷に鑑定せよと言はれさすれ
ば山樂でも書いたのではないかと思ひさす、壯
年調馬の圖、京都の醍醐寺所藏の屏風でありま
して、それが一雙ありさす、これは先きに申しさ
少年調馬の圖よりは大きな屏風であります、シ
テ繪の様も前とは少しも變はりがない只少年と
壯年の違がある斗であります、彦根屏風、これ
は非特傳傳の所藏になつて居りさす、所傳遊女等
が種々な事をして樂んで居る所を琴棋書畫の圖
に當て、書たので、誠に品の善い立派な繪であ
りさす、其内には山水も書いてありさす、其
山水の風から申しさすと古法眼元信の筆つきが
ございさして、デ頗る高尚な繪であります、そ
れからあの人物を申しさしても普通の浮世繪と
は違ひまして非常に氣高い人物が書いてござい
ます、其外器物でも三味線、雙六、煙草盆、煙管
に落ち附いて配色の法も大に宜しさを得ており
ますから浮世繪では實に上乘の傑作、人も言ひ
自分も信じて居るのであります、所が此繪は無
論又兵衛として傳つて居るのであります、私
が此繪は又兵衛でないといふことに就て餘程考
へを持つて居りさす、それは其内にございさす
る器物に就いてです、決して又兵衛當時の繪
でないといふことを明言することが出来る、併
しなから浮世繪が又兵衛でないからといふて眞
打ちが下がったと云ふことにはない、又兵衛以上
の浮世繪は深山あるのであります、兎に角此繪
は外に類のない位優等な繪であります、其事は
後にお話いたすとして次に移りさす、次は豊
國祭の屏風、是は京都の豊國神社の所藏であり
ます、さうして傳來は内膳一深又は浮世又兵衛
だのといふことになつて居りさす、是屏風は昔
て京都に豊國祭がございさした時分に研究の爲
めだから參つて見て來るよふにと命せられさし
て私が取調べた内の一ツの品でございさす、所
が又兵衛でもなければ又内膳一深の筆とはドウ
して云はれさないのであります、其結果是は内

化 俗 風 俗 勢 力

三味線の起原に關する一説

○重野博士の三味線の起原に關する談話 三味線の
起原に關して今日まで専ら俗間にて言はるるもの
は琉球の蛇皮線の變化しるものと云ふに近し然る
に近來之に反對する一説ありて實際にはいづれの
變化しるものありと云ふ其來歴を尋ねれば慶長年
中葡萄牙人タアペーキウと稱する樂器と船載しりし
少これ即ち現時の胡弓にして最初の長崎邊に於ての
み流行しりしに或時偶然の原因より京都へ傳來し
されども臺と摩せる器械と分離し居りし故其發音
法を知るに由なく種々工夫を凝らししる未琵琶の
チにて之を彈きしに頗る妙音を發せしかば時の名人
澤津檢校(琵琶に堪能なる人あり)等巧に之を弄し大
に世人の注意を引けり有名なる小野のお通を淨り
の新作と出して澤津等に歌はしめし此頃の事にし
て從來の單に扇拍子に合せて歌ひさる殺風景の淨る
りもこの偶然の原因よりして大に其の面目を改むる
に至りさるからんとこれ即ち豊庭篁村氏等が唱ふる
所の説ありと云ふ右の二説中何れが眞の事實ある
と定むるの容易からぬことなれども余が考ふる所に
よれば多分前説の方當と得るものありと思はる
あり其證據に三味線の最も流行するに至りさる
元祿時代にして其以前に三味線の事と記し
るものもなく從て種々の繪畫等を取調るも元祿以
後の風俗畫に之を畫さるもの頗る多きも其以前
の繪卷物等に之に其形跡を存せざる如し且又其
始めて行はれさる小野のお通の時代ありと云ふ
最も信じ難き説にしてお通何れの時代の人ありし
か正確に知り難き所なれども文祿、慶長前後に相違
なし此時分に種々の語り物唄ひ物等の其發達極め
て幼稚にして未だ判然種々の分派名稱とも生ぜざり
しあり只お通あるもの稍々文才ありて淨瑠璃姫十二
段の昔物語と作りさる大に時好に適しされば終
に後世に至るまで凡ての語り物と淨瑠璃と名くるに
至りさるのみにて實際其頃まで純然たる扇拍子
にて歌ひさるものあること疑ひなし云々とこれ重野
博士の三味線談の要領あり

育小大 其樂 今日 緑の右 奇せ思 此器を 所の あり古

三味線の起原に關する一説 重野博士の三味線談
の昨日の紙上に掲げさる如くあるが今某老人の話
によれば豊庭氏の説大に眞に近きものありと云ふ其
理由第一三味線の形が少しは蛇皮線に似たる所
あれども大体に於て著しき差異あり之に反して胡弓
の臺と其形と均し何れも異ありさる起
原と有さるものと思はれさる次に重野博士の説によ
れば三味線の事と記しるもの及び其繪畫等の元祿
以前に其見當らざるとの事あれども實際に於て少く
之に反對の事實ありとせざるも手近なる例と引け
ば春臺翁の隨筆中にも淨瑠璃と云ふもの三味線と同じ
頃開始されり云々の語あり而して翁は小野のお通を以
て淨瑠璃の先祖と考ふるものあり且又翁は延寶八年に
生れ延享四年に死せり故に三味線の起原にして元祿
時代にあらず勿論翁の存生中と云はざる可からざ
るも疑はしき点あり以上の二理由より考ふれば三味線
の起原は全く慶長前後の事にして胡弓に形取りさる
ものありとの説大に信ぜべき所あり云々と

化 俗 風 俗 勢 力

三味線の起原に關する一説

○重野博士の三味線の起原に關する談話 三味線の
起原に關して今日まで専ら俗間にて言はるるもの
は琉球の蛇皮線の變化しるものと云ふに近し然る
に近來之に反對する一説ありて實際にはいづれの
變化しるものありと云ふ其來歴を尋ねれば慶長年
中葡萄牙人タアペーキウと稱する樂器と船載しりし
少これ即ち現時の胡弓にして最初の長崎邊に於ての
み流行しりしに或時偶然の原因より京都へ傳來し
されども臺と摩せる器械と分離し居りし故其發音
法を知るに由なく種々工夫を凝らししる未琵琶の
チにて之を彈きしに頗る妙音を發せしかば時の名人
澤津檢校(琵琶に堪能なる人あり)等巧に之を弄し大
に世人の注意を引けり有名なる小野のお通を淨り
の新作と出して澤津等に歌はしめし此頃の事にし
て從來の單に扇拍子に合せて歌ひさる殺風景の淨る
りもこの偶然の原因よりして大に其の面目を改むる
に至りさるからんとこれ即ち豊庭篁村氏等が唱ふる
所の説ありと云ふ右の二説中何れが眞の事實ある
と定むるの容易からぬことなれども余が考ふる所に
よれば多分前説の方當と得るものありと思はる
あり其證據に三味線の最も流行するに至りさる
元祿時代にして其以前に三味線の事と記し
るものもなく從て種々の繪畫等を取調るも元祿以
後の風俗畫に之を畫さるもの頗る多きも其以前
の繪卷物等に之に其形跡を存せざる如し且又其
始めて行はれさる小野のお通の時代ありと云ふ
最も信じ難き説にしてお通何れの時代の人ありし
か正確に知り難き所なれども文祿、慶長前後に相違
なし此時分に種々の語り物唄ひ物等の其發達極め
て幼稚にして未だ判然種々の分派名稱とも生ぜざり
しあり只お通あるもの稍々文才ありて淨瑠璃姫十二
段の昔物語と作りさる大に時好に適しされば終
に後世に至るまで凡ての語り物と淨瑠璃と名くるに
至りさるのみにて實際其頃まで純然たる扇拍子
にて歌ひさるものあること疑ひなし云々とこれ重野
博士の三味線談の要領あり

育小大 其樂 今日 緑の右 奇せ思 此器を 所の あり古

居られずのです、其書を見ますと慶長元和の遊女の風を書いたもので、誠に閑雅な繪であります、流派から申しますとこれは狩野に属して居りさすかな、風俗人物の繪、屏風です、是

は關君の所藏でありまして、彦根屏風と同じ圖であります、唯私が見ます所では筆の強い柔いがあり、彩色に厚い薄いがあり、紙の大小があり、金箔を用いたと用いないの違がある、さう云ふ所からして是は彦根屏風の寫しではないかと私は想像して居るのであります、少年調馬の圖、是は博物館の御藏品であります、十二幅になつて居りますが、能く考へますに是は元屏風になつて居りましたのでございましょうと思ひます、其書き口は中々強い筆で、彩色が大變に厚い、丁度慶長頃の風を書いたものであります、其馬に乗つて居る様は千態萬狀名状すべからざる様を書いてあります、一體が狩野風の繪でありまして私が獨断に鑑定せよと言はれますれば山樂でも書いたのではないかと思ひます、壯年調馬の圖、京都の醍醐寺所藏の屏風であります、それが一雙あります、これは先きに申した少年調馬の圖よりは大きな屏風であります、シテ繪の様も前とは少しも變はりがない只少年と壯年の違がある斗であります、彦根屏風、これは彦根藩の所藏であります、彦根藩の御藏品であります、種々な事をして樂んで居る所を琴棋書畫の圖に當て、書たので、誠に品の善い立派な繪であります、其内には山水も書いてあります、其山水の風から申しますと古法眼元信の筆つさがございまして、デ頗る高尚な繪であります、それからあの人物を申しましたも普通の浮世繪とは違ひまして非常に氣高い人物が書いてございします、其外器物でも三味線、雙六、煙草盆、煙管に落ち附いて配色の法も大に宜しきを得ておりますから浮世繪では實に上乘の傑作と人も言ひ自分も信じて居るのであります、所が此繪は無論又兵衛として傳つて居るのであります、私がか此繪は又兵衛でないといふことに就て餘程考へて居ります、それは其内にございしまする器物に就いてです、決して又兵衛當時の繪でないといふことを明言することが出来る、伊しなから浮世繪が又兵衛でないからといふて打ちが下がったと云ふことにはない、又兵衛以上の浮世繪は深山あるのであります、鬼に角此繪は外に類のない位優等な繪であります、其事は後にお話いたすとして次に移りますが、次は豊國祭の屏風、是は京都の豊國神社の所藏であります、さうして傳來は内膳一深又は浮世又兵衛だのといふことになつて居ります、是屏風は昔て京都に豊國祭がございした時分に研究の爲めだから參つて見て来るよふに命せられまして私が取調べた内の一つの品でございします、所が又兵衛でもなければ又内膳一深の筆とはドウしても云はれないのであります、其結果は内膳重信の筆と云ふことを確かめました、其詳しいことは又後に述べることに致しまして、此處では述べませぬ、春宵秘戲圖、これは名古屋に居ります某の所藏だと云ふことであります、是は前に述べました彦根屏風と同様のものでもあります、男女遊樂の圖、是は曾て大學に居りました後に美術學校の幹事をして居りました、ヘノロサ氏が持つて居るのであります、これも彦根屏風と能く似たものであります

日本新聞明治三十五年一月六日

器勢の俗文化

大正十三年四月十四日

されども臺と摩せる器械と分離し居りし故其發音法と知るに由なく種々工夫と凝らし居る末琵琶のヤチにて之と彈きしに頗る妙音と發せしかば時の名人澤津檢校(琵琶に堪能なる人あり)等巧に之と弄し大に世人の注意を引けり有名なる小野のお通と浄るりの新作と出して澤津等に歌はしめし此頃の事にして從來の單に扇拍子に合せて歌ひたる殺風景の浄るりもこの偶然の原因よりして大に其の面目と改むるに至りたるからんとこれ即ち豊庭篁村氏等が唱ふる所の説ありと云ふ右の二説中何れが眞の事實あるかと定むるに容易からぬことなれども余が考ふる所に元祿時代に於て其以前に三味線の事と記し居るものも亦く從て種々の繪畫等と取調るも元祿以後の風俗畫に之と畫さざるもの頗る多きも其以前の繪卷物等に之に其形跡と存せざるが如し且又其始めて行はれざる小野のお通の時代ありと云ふ最も信じ難き説にしてお通何れの時代の人かりしかん確に知り難き所なれども文祿、慶長前後に相違あし此時分に種々の語り物唄ひ物等其發達極めて幼稚にして未だ判然種々の分派名稱とも生ぜざりしあり只お通あるもの稍々文才ありて浄瑠璃姫十二段の昔物語と作りたるが大に時好に適しされ終に後世に至るまで凡ての語り物と浄瑠璃と名くるに至りたるのみにて實際其頃までの純然なる扇拍子にて歌ひたるものあること疑ひあし云々とこれ重野博士の三味線談の要領あり

○三味線の起原に關する一説 重野博士の三味線談の昨日の紙上に掲げたるが如くあるが今某老人の語によれば豊庭氏の説大に眞に近きものありと云ふ其理由の第一三味線の形が少し蛇皮線に似たる所あれども大体に於て著しき差異あり之に反して胡弓の臺との殆ど其形と均し何様観ても異ありたる起原と有するものと思はれ是次に重野博士の説によれば三味線の事と記し居るもの及び其繪畫等の元祿以前に於て見當らざるとの事あれども實際に於て少く之に反對の事實ありとせざるも手近なる例と引けば春臺翁の隨筆中にも浄瑠璃と云ふもの三味線と同じ頃に始まれり云々の語あり而して翁の小野のお通と浄瑠璃の先祖とあるものあり且又翁の延寶八年に生れ延享四年に死せり故に三味線の起原にして元祿時代にあらず勿論翁の存生中と云はざる可からざるに従つて右の如き言と爲その道理なきありこれを最も疑はしき点あり以上の二理由より考ふれば三味線の起原は全く慶長前後の事にして胡弓に形取りたるものありとの説大に信せべき所あり云々と

育小大
く其樂
も今日
線の右
寄せ思
此器を
る所の
あり古
と一

和訓琴

○人の將來が早熟老と断定せられた以上は早熟老の方に獎進し行くべきが大略である遊遊し行くべしといふた處で一步先きに熟すべき地球を後残りにして人ばかり先きに行くのは遊境である地球の熱期と同步調に行くのが獎進である處が日本人は早熟老の噂も立つた位であれば先づ大体の方向は間違はぬで御目出度いけれ

が定の分量が置かれてあるとすれば人の將來が早熟老となるも晩熟老となるも人の宿命を誤は來たさぬ決して此の點に就て氣を揉まぬ



序
音樂の風を化
裨益あること
器々古今雅俗
俗間にて最も
不出づるもの
ひを遣り情を
把らざるを
風間風化の勢
未論者ハ此器

才出書後 日 四月 日 廿 十 二 月 日

○三味線の起源に關し又一説 三味線の起原に付て諸説區々にて重野饜庭の諸氏多少考と異にしパイオリンの變化せしもの即ち三味線ありとの説の暫く置き三味線の蛇皮線の變化せしものにて古へ琉球より傳はれりとの説の糸竹大全に載せる所と絶て異るかし同書に云ふ永祿年間琉球より樂器と渡り蛇皮二絃あり泉州堺の琵琶法師中小路三絃に更む之と三絃と云ふ云々と然れ共尙茲に考ふべき事あり正字通飲字の註と案をるに「樂律ニ有聲歎一以聲相轉而合也梁武帝自制四器一名曰通無通施三絃因以通聲隨聲酌其清濁高下也」と今俗間に弄三味線の太鼓繁手にして能く鄭聲とを淫器是より甚しきものありて武帝の通によく似たり加之から唐朝に既に三絃の名あり箏に合せて之と鼓を云ふ然れ共多くの淫哇の詞借優の習ふ所のみ孔子の所謂鄭聲の淫ありと云ふものは是を蓋し淫との靡あり巧あり淫慾の淫に非を樂んで度に過ぐるをかり飽にして實さきありと云へば恰も三味線の太鼓繁手あるに異ら三味線の元三味線と號せ三つの線ある故あり三の字とさみと云ふ閉口の音ハ子飯名とみと云ふ例のくらもあり即ち目論ともくろみと云ひ燈心と云ふみ御帶とかみおびと云ふの類あり然るに何時の頃より味の字を加へて三味線と書くに至れるをさるる三味線の本所の琉球の蛇皮線にあらで唐朝の三絃あり三絃三線義相同じきより三線とありと三味線とありて今日に至りしにあらざる乎と云ふ老あり

育小大
其樂
今日
線の右
寄せ思
此器を
る所の
あり古

糧食品購買ノ件更正廣告
一 廣須賀造船部製鋼場新築工事壹式
此入札保証金貳千五百貳拾圓
右請負望の者ハ來る四月廿一日午前十時本部に出頭し圖面仕樣書、契約書、現場及諸規則等熟覽の上四月廿四日午後一時入札とせし但同時開札を又此入札者の造家學士、機械學士、及土木學士を併有し且つ各二年以上其營業組合に屬し實地事業に従事し且つ證明書並に請負本人の二年以上其營業に従事し且つ此契約の建築部長遠邑容吉擔任せし
二十四年 廣須賀鎮守府建築部
四月九日

大槻文彦藏

和訓彙

合だ
 ○人の將來が早熟早老と断定せられた以上は早熟早老の方に獎遊し行くべきが大略である。遊遊し行くべしといふた處で一步先きに熟すべき地球を後残りにして人ばかり先きに行くのは遊遊である。地球の熱期と同步調に行くのが遊遊である。處が日本人は早熟早老の噂も立つた位であれば先づ大体の方向は間違はぬ。御目出度いければ



序

音樂の風を化し俗を改め國家の治道化育大裨益あること。今更言ふまでもあり。さて其樂器古今雅俗の種類甚だ多しといへども今日俗間より最も盛行するものは三味線の右小出づるものあり。耳をかきふけ心を寄せ思ひを遣り情を發し燕居小宴會小むべし。此器を把らざるをあらざれば今日三味線小因る所の風間風化の勢力亦大いありといふべきあり。古來論者此器を以て鄭聲あり淫曲ありとて一



此書の専ら近時獨乙診斷學書の巨擘と稱するフ
 ヲルト氏の著編に據り傍ら諸種の診斷書と參取し纂せし者あり抑も診斷の學を醫學全科中最も要の科目にして講習に試験に實地の治療に近來益々讀者として此學の梗概に領取し能く之を際選に選用せしむるにあり。今上巻刻成りて發行す。日本橋通三丁目丸善。本郷切通坂南江島馬喰町三丁目丸善。本郷春木町二丁目丸善。島利支店。京都市若林。大坂三木。

購買入札

- 一 唐津石炭 精製粉炭二寸目備に發るもの 和斤二十萬
 - 一 池田粉炭 精製粉炭二寸目備に發るもの 和斤三萬
 - 一 備後炭 此入札保証金六圓 二千五百貫
 - 一 備前炭 此入札保証金七圓 一千五百貫
 - 一 備後炭 此入札保証金四圓 一千貫
 - 一 備前炭 此入札保証金一圓
- 右競争入札に付し購買を望の者本月二十五日まで當校へ出頭見本品及入札心得書約契書案等熟覽の上同二十八日午前第十時までに保証金相添へ入札差出をべし。同時開札。此契約は東京工業學校校長手島精一擔任す。明治廿四年四月 東京工業學校
- 東京市神田區淡路町二丁目拾一番地
 第六十九國立銀行
 一 特別當座預金 利息年五分五厘
 但金高五圓以上貳千圓未満
 右是迄利息年五分の處本日より
 年五分五厘
 引上げ 預け入れの當日より引上げ

概ふ斥られど其初よりかくまでふ世俗ふ感染
せし久しき流行のあらきしもの因るべけし
ど亦人心のさしむる向かぬもの此久しきを
保つべきいはれあるべし民情よかる
ひさるもの、俄ふ廢しづるも亦知りやまき
理あり況や三味線元ハ葡萄牙國のラベカと
いふ樂器ふて其器後ふ一變してバイオリンと
あり今西洋より一般雅樂に用るられ遂に樂器
の王と稱せらるるふ至まらかる器あるを其
根元決して鄭聲あるものふあらざる唯其物初

め我國ふ入りより次第ふ民間ふ流傳してい
つら其本分の雅調を失るめ終に穢褻ある
歌詞ふ上せ隨ひて曲調も淫靡ふ移るあらん
今の世ふ當りて文學の士其歌詞ふ正を所あり
伎藝の者其曲調ふ改むる所ありて此民情ふ大
勢力ある器を活用して其鄭聲を根元の雅聲に
復せしめ終に以て風化の功を奏せしめ是を
實ふ音樂化育の妙用あらん今先づ此器の傳
來傳播調子製作等の事を考證して三味線志を
作る

明治十八年三月

大槻文彦識

目録

西洋傳來ノ史

琉球傳來ノ説ヲ駁ス

三味線傳播ノ事

製作ノ事

調子ノ事

三味線志

西洋傳來ノ史

今世我が國ノ俗間ニ盛行スル三筋ある

樂器あり古ハニサミセンといハ三線サミセンノ

音ノ轉あるべシニサミセンといハ三線サミセンノ

轉トクニサビセンシヤムセン又ニシヤムセンカ

トカハハ文字ハ常ニ三味線ト借書セリ此器昔

より皆傳ハテ琉球より傳來セリといハ其其所傳傳

説共ニ後然シテ其元ハ支那ノ琵琶琵琶玩玩咸胡不見

月琴提琴等といハ樂器ノ一變變セリものあり

節用集大全
三尾線とあり
日本風土記全
浙兵制附録言
語部小三絃子
ニ皮前とあり
永程新書

と 支那の三絃の器もあれど自ら異あり 然
まども いづれも推測の説ども して まづて取
るは足らざる

三味線傳來の考證はつきてハ今爰ハ驚くべき
新發明の説を述べん即ち此器ハ全く西洋樂器
ふて其初ハ即ち今の胡弓あり然して其傳來ハ
足利氏の末世より彼の葡萄牙人が天主教を我
り國ハ傳播せんとして連年渡來せし頃ハ彼の鳥
銃烟草あるども共ハ此器をも齎し來りしもの
と ふら と あ と 疑 あり き ふ 似 たり

初め伊澤修二君説をありて曰く凡そ和漢琉球
從來の諸樂調を通考するは三味線其中ハ於て
特り其律の循環を異はするありと著し其元ハ東
洋の樂器あらんと疑ひ思ふ所ありとあるは因
りて遍く三味線の事を記ししる諸舊記を搜す
たるハ淺草川船遊池の記といふ常ハ琉球より三味
線を蛇皮といひ小弓をカハカと云ふと
いふ あ と を 載 せ り 三味線と小弓とを言ふけ
段ハ又和漢三才圖會にも鼓弓按未詳其始相傳
始於南蠻 此頃南蠻といふ指即ちと見る淺草川

定宣明曆三年
の歳旦す蝶子と誹名を改む武士の子あり由

船遊記の記者ハ神田定宣として元和中ニ生れし
江戸の人あれを其所記の舊き事と知るべし
其書ニ傳ふる所のラヘイカといふ原語ハ必定
洋語あらんと心付思きし所ハ伊澤君復ニ洋書を
もとめて探り得た即ち疑ひもあらず葡萄牙語
として其國語といふ *Ralaca* といふ英語ハ *Ral-*
といふもの是あり是ハ於て又博く洋書を
繙き諸傳を参考しし其語原ハ亞刺比亞
の *Ralal* 圓形の楽器 のふ起り佛語といふ *Ralac* と
西班牙語といふ *Rabal* といふ抑此器ハ古く西洋

マスケールの楽器
考、上野の音楽
学校ニあり

ふ行をいふものも其初ハムルル人亞非利加北岸の人
民の樂器を傳へしありといふ更ニ其元ハ波斯亞刺比亞邊の物
り其製、胴大く棹短く胴ハ板を張り絃ハ獸腸獸の腸殊ニ羊の腸をよて三線あり弓をもて
絃製して作る絃ありキヤット
あれを弾く其初ハ二絃ありしものを後ニ三絃
とちせりといふ其三絃ありし頃ハ我々國ハ
渡来せし事分明あり然して其器并ニ調ハ次の
如し
此圖ハ西洋千八百七十五年板英人マスケール
氏の樂器考の中ニある第十一世紀の古彫刻の

文部省



像もて「ビオラ」といふ器
あり即ち「ラベマカ」の類
もて用法ハ今の胡弓の
如し

ラベマカの調



壹越黄鐘平調として今の三味線の
調は合えをれを二上り調の如くは
して平調の處のみ二調程高きもの
あり

扱其後西洋よりハ此ラベマカを次

第ふ改良して終ふ又一絃を加へて四絃として即

ち今世西洋一般小行え此を樂器の王と稱せら
るゝ「バイオリン」といふものあるは近年我が

國にも入るて行なふものありバイオリンの

をラベマカと略同ト今のバイオリン製作調子共小

右の次第あるをもてあれを通考せしむる三味線

ハ元來葡萄牙の「ラベマカ」といひて弓もて弾く

三絃の樂器ありしを足利氏の末世に當りて其

國人我が國に持渡り扱そのまゝもて傳へたる

ハ即ち今の胡弓胡弓も初ハ三絃ありき今

四絃ありハ後ふ加へたる

胡弓の調子
本云三本
調子三本
古屋の調子
本云

胡弓の調子
皮を

ありこれハ三筋の二筋ハ同音扱又弓にて弾
きけるものないつゝ我が國の琵琶法師等が
別小其器を琵琶ふやつて弓を廢し撥は代へ
轉手海老尾も琵琶の名小取けり製作も大に改
むる所ありて胴を猫皮注最も薄くして最も響
きの高意小取するものなりて張る獸腸弦を固よ
り製作を知らざりてべけも琵琶小同し絹の
糸を用る胡弓も亦扱其絃三筋ありやうて三
線と名づけけり然るらん然して初ハ一定の
法もあくむざと弾きうゝものを次第小替師

等が其曲を工夫し淨瑠璃起りてより此器專ら
行はる事とあり隨ひて新手妙曲も愈出で
愈奇とあり終ふ今日に盛あるふ至るもの
事知るべし扱此器其初南蛮人の渡りしもの
あると争ふべきありるさ小舊來の諸書一同
ニ琉球傳來とせし事ハ如何ふといふに是外
あらば彼の切支丹の嚴禁ありて以來其渡せる
器も亦其嫌を避けて南蛮とい言をむして名を
琉球注の供りしものあるべきと論ありるべし
其實琉球注ハ却て内地より渡りたる
もの如く尚後條に詳に辨むべし

右の如く浅草川船遊記に纜カヘイカカの原語
を傳へしより遂に搜索して今日始めて此確乎
たる考證を得て三百年来空妄を傳へしもの一
朝よりして全く其真傳を發見するに至りしは
亦一奇あり亦一快あり

因ふ云抑南蠻人の最初三味線と同時ニ渡
し火繩筒の鳥銃を我が國よりハ三百年来
その儘ニ傳へて改良する者も無かりしは
西洋よりハ其間ニ火繩を燧カと雷管カとニ
込カとニミニールとニヌナイドルとニ大ニ改

正なる所ありて再び近世に至りてあれを我
が國ニ傳へたり三味線恰もあれと同く我
が國よりハ最初南蠻人の渡來持せしむるを
今日まで用ゐてありしは西洋よりハ是も
其間ニ改良して一絃をも加へ今の樂器の王
とまで稱せらるるバイオリンとて再び渡
せる事いと善く相似たるも亦可笑し事事

琉球傳來の説を駁す

三味線の傳來に就きて旧記諸書の傳ふる所を

見^覽る小各少異ありといへどもその琉球より来
しりといふに至りてハ諸書同音不出づるが如
く爰小先づ諸説を擧げて其異同を論じて然して
後小其所傳の誤を辨むる

○律呂三十六聲麓の塵享保十七年板五卷泉南佐野興津濱漁翁

小云 上略 本邦へ傳つし初ハ後柏原院の御世

ハ梅津少將といつる琉球國へ漂泊して

小女ハ琵琶を學むも國王の前より天日照る

月ハ十五夜が盛りと歌をもしハ今の琉球組

あり云々

梅津少將詳ナラズ

書

○聲曲類纂弘化四年板六冊齋藤月岑 小琉球年代記を引

きて曰く後柏原院の御宇の頃梅津少將とい

ふ人性質音楽小委かりしが應仁の亂を避

けて長門國あり大内義隆小定^寄りたまひし

義隆の家老陶尾張守晴賢密小少將を害せん

あつてを圖りしかむ義隆此事を知りて文を書

して毛利元就へ避けしめらるらす其船暴風

小會ひて漂ひ琉球島ハ漂着したまひしを兼^{カネ}

城^{シラキ}按司りつくりしみるらせしは按司の娘よ

く月琴を彈せり少將ハ固より音律ハ巧みお

琉球年代記ハ
太田南詞著
ト見ユ

尚元王弘治元年
永禄を歴て元
龜三年小亮す

石磨と名づけ
後小石村と名
乗るも皆石田
村の名小因み
しものう

まゝりつらバ立所は學び得て月琴の妙手とふか
まゝり遂は此女は通じて夫婦とあり共は月琴
の名國中は隱れ無かりしを尚元王此由を
聞き夫婦を宮中へ招きて月琴を試みむ少
將王位を志やうして歌を作り歌ひたまふ今
琉球組とせは唱ふるものあれあり王此曲は
感して品々引出物ありて日本へ歸り送らる
む永禄五年の春夫婦共は豊前國へ着き夫は
り同國石田村といふ所は隱れ住みたまひて
一子を生む幼名を石磨と名づく此石磨晩年

ふ及びて贅とあはしり月琴の秘曲を父母より
受け得たりしをわむ其形をものむきして丸胴
を角胴は製しハ乳の猫の皮を以て両面は張
り月琴の意を以て海老尾は月の形を残す此
人後増官して石村檢校といふありけり又云
琉球より椰子をもて胴を作り薄き板にて
裏を張り蛇皮を以て表を張る云々
○浅草川船遊記前記云三味線の起りハ元
琉球より薩摩へ渡り琉球國ハ蛇多くあり
て民屋路次は横より女童を惱ます五月雨洪

今も琉球は毒蛇
をあり巴布とい
ふ人を害ま
こと甚し

和訓栞
ウハカ 羅面
絃ト書ケテ鼓ヲ
也トナリ
同中編ニササキ
ハ作ニ説アリ

水の頃ハ多く出でくうるさかりくうども三
味線と小弓の音ハ恐むして寄マ來らず夫故小
男女とも小此二種を樂しむ彼の難儀を逃む
或ハ一興をあせりとりや三味線ハ蛇皮小弓
むらへいりといひり何の頃より此の國小渡
り日本小遍くまきて武江小翫びて恋慕の道
の寄太鼓とや云々 表録
○絲竹初心集寛文四年板三卷盲人中村宗三
云抑日本小三味線をひきそめし事ハ文禄の
おろろひ石村檢校といふ琵琶法師あり心た

ラハカ原製
稍琵琶小似大
り

くみりして器用無雙の者ありある時琉球の
島小渡りけり小彼の島小小弓といひて絲三
筋ヲ鳴らす物あり小き弓小馬の尾を絃ニ
かけて引くあれむ小弓といひふとぞ石村大
れをさぐり見る小琵琶をやつゝくる物あり
絲の調べやうも一二を琵琶の如く三の絲ハ
琵琶の三よりも二調あそふど高く合あそせたるもの
ありと思つり所の者いひけるも此島有も真
蛇の多き所あるがらへいりといふものあり
て此のまじりを食物とすされむらへいりの

或人云野外
て牛吼の聞
る限りハ蛇
の類避け去
鼓弓ハ牛吼
音ハ擬して
り蛇を御
るものあり

鳴く聲小弓の音ハ少くもたがえざり故真蛇
を退けんが為ニ専ら引くあり琵琶法師と爰
小逗留の間ハ引きたまふといふ其後石村京
都ハ歸りて同く琵琶をやつ此三味線を
作り出せり琉球の島より得て來るといふ心
まて琉球組といふ事を作りおけり云々
○嬉遊笑覽喜多村儀第一本欄外書入也云
淺草川船遊記ハ三線ハ蛇皮小弓ハイ
カといへるも誤りあらうラヘイカを蟲の名
といふ言ハむさるを絲竹初心集ハ蟲の名と

按ハ此説
何ハ據と
云ハ

す非あるべし案ハラヘイカハバライカ
の誤り也即ち三絃の名あり魯西亞ハ然云
ふ魯西亞ハ此ハ古く渡り來り國ありねども
是ハ羅匈語ありや歐羅巴洲の通稱と見え
たりされど名の由ハ知らぬ元蟲ハさる名
のありもや志けん胡弓をケレプロといふと
あハバライカハ其槽三角轉手ハ三つあり
たり

南島ハ琉球カ

○南島志新井白石云其器則三絃子云々俗好聲
樂皆弄三絃相傳以為絃響能辟蛇害

○和漢三才圖會樂器部云三線其絃三故名三線琉球國好多用之然不為樂器婦女里子等每鼓之遊舞其皮用蛇皮焉本朝亦為嬉戲必用物
○又云鼓弓按未詳其始形似三絃而小不用撥以小弓弦鼓之故名鼓弓其意最悲哀者也勢州宇治乞巧每鼓之謠矣相傳鼓弓始於南蛮彼土人行住每鼓之以避蛇虺

按むる 絲竹初心集 小弓と いふとあり 此より小弓弦を引けを 鼓ふが故に鼓弓と書せり 胡國の樂器といふ意は 是亦南蛮に始まる

五代將軍
家傳
人藤植
校三傳
ト又セバ
名古
胡弓
ナリ

○嬉遊笑覽云鼓弓ハ三線と同ト頃琉球より傳ふ云々絲竹初心集ハ三線を鼓弓より作りて作也といふハ非あるべけれど鼓弓も元ハ三線を用るしとハさもあるべし寛永頃の画よかけの鼓弓三絃より槽圓く曲物の形たり弓もいと小く其音あれをもて知るべし
按むる 小胡弓元來三絃あり 三の線の音の淋しとて後世一絃を加へたるものあり 其家筋より言傳ふ然して三の線の筋を同音より調ハ依然たる三絃あり且調子の合たり尚後の調子の條小委し
○又云季吟獨吟ハ神代よりあそ伊勢をとり

△本寧春臺
寫本三卷

△倫訓蒙圖書
物も其の部
小弓引伊勢野
山より出るとまの
ふし一風ある云
物も其の種
編木指をわき
下品の一属あり

歌天照らす月たあまの弓張て春臺獨語
胡弓といふものハ三線のたぐひあれども其
るが殊ふいやげある故もや好む者も少く
唯めくら法師非人の所作もてやみぬを風
俗をやぶ。程の事あり。和漢三才圖會ハ鼓弓
始於南蛮といへり南蛮といはづあを指を
も辨へづ。唐がらを南蛮胡椒といふ類
ひもやさらを廣く異國をいふあるべし云々
以上の諸説を見るハ琉球年代記も梅津少将
琉球ハ渡り月琴を學び得て琉球組を作り
琴の塵の

△ラベイカ原製
亦略月琴とも
似たる所あり

小弓とまの方
正ラベイカ元
来撥からず
弓も引くも
のあり

△大辭
刻

説も同ト但し月永禄五年豊前ハ歸る其子石村
琴を琵琶とす。永禄五年豊前ハ歸る其子石村
檢校あまを傳へ月琴を造りかへて三味線とを
とあり又絲竹初心集も石村檢校文禄の頃已
も直ハ琉球ハ渡りて絲三筋の小弓を學び
も亦小弓歸朝して後三味線ハ造りかへ琉球組
を作るといふ其傳ふる所ハ稍異なる所あり
といへども畧合ふ所あるが如くさらハ次あり
諸書も其説大ニ畧あるものあり
○絲竹大全大奴佐元禄十二年板ハ云三味線
の起りハ永禄年中ハ琉球國よりあまを渡す

文部省

其時ハ蛇皮ヲ張リて二絃有る物あり泉州
堺の琵琶法師中小路といひける盲目人の
取らせたりけりを此盲目喜びて調べつ試
みけきと教へおうぐれを音律協たずあを
心憂くおぼえて長谷の観音へ詣で一七日參
籠して彈らやうを教へたまふと祈りて又あ
らたある靈夢ありて階を降る時ハ大中小の
絲三筋盲目が足ふかくるあまり三筋の絲
をかけて彈く無盡の色音出でたり夫より
三絃ふきをむる故ハ三味線と志かいふ云々

○松の葉元祿十六年六月ハ云人王百七代正
親町院の御宇永祿の頃琉球より蛇皮二絃の
樂器渡り和泉の國堺ハ住める琵琶法師中小
路が手ハ傳へ長谷の観音の靈夢ハよりて一
絃を増し三絃とせし又世ハ三味線と呼びて
調ぶる音ハあらる呂律備をらむといふ志
とあり是ハ一より二を生す二より三を生す
三より萬物の音聲を生む理至まり云々
○竹豊故事寶曆六年板一ハ云抑三味線の来
由といつる元來琉球國の弄び物ある故ハ琉

球絃と號す琴瑟琵琶和琴等の音を摹したる
たるものあり日本小あまを傳來せし初ハ人
皇百七代の帝正親町の院の御宇永祿五年壬
戌の春琉球より泉州堺の津小渡り來る其頃
の武將織田信長公下知ありてあまを朝廷に
獻し奏覽し入も奉る時小帝久我右大将通興
卿を以て其頃音曲小名譽を顯たせし琵琶法
師瀧野檢校を内裏に召出されあまを弾かせ
て叡聞ませし其曲甚だ妙音ありし
を叡感ませしぬ其砌京都小名を得し琴瑟

倭訓栞中編

さみせん
三絃の胸を冒か
猫の皮を用ふるハ
猫よぐ人の膝ま
た故よりと云り

琵琶の細工人亀屋市郎左衛門石村といひし者
此三味線を摸し作り出せり琉球より三味線
の胸を蛇の皮を以て張るといへども我が朝
ふかふる大きある蛇あり依て猫の皮も代へ
てあれを張りたり云々
是等諸書の説く所區々あると此の如く前ふ
擧げたる諸説も梅津少将或ハ石村檢校已も
自ら琉球小渡りて彼地より此器を携歸せりと
いひ此小掲ぐる諸説も據もむ琉球人泉州堺の
津小持渡りてあまを中小路或ハ瀧野檢校彈き

始むといふ浅草川船遊記前ハ薩摩又大奴佐
 の説の中小路が一絃を加へたりといふハ其術
 を神秘ふせんが為の妄説とて初より三絃あり
 一と論無かるべし南蛮人固より三若一姑く
 其説は随ひ琉球より二絃とて傳來とせむ琉
 球とてハ昔も今も二絃あらでハ叶たぬ次第を
 るハ現在彼の地とて用るるもの皆三絃とて古
 今同ト況や琉球傳來扱又竹豊故事の説ある永
 禄五年織田信長あまを得て禁裏奉とぬとい
 ふも當らず信長の京入りハ遙の後ある文永

禄十一年あらむあり

扱右ハ列ねたる前後の衆説を引きくらめて考
 ろるハ尚事實の合をぬ事どもありそと是等の
 年代より前ハ既ハ此器の世ハありきと覺
 き事あれむあり

○嬉遊笑覧云さて三絃もや古く渡りた
 る事ハ明らかり室町殿日記十九ハ遊女二人
 を中ハ置きて何心なく三味線を弾て遊ひ居
 けり天文永禄頃狂言記外五十番の内ハ昆布
 賣口志やみせんうて上るるがハ昆布賣る

△小弓と二信もその
 かみと信も其有
 事とみぬ其器
 早ハ海とてあら
 と世のさびがまほ
 して説お者とま
 く能ひまおほえ
 ちのまといふか
 又祥子とて石村
 二弾出し者故始
 せと見えそと

光廣卿の野
作と云ふ

あといら^見り狂言い古きものあれども狂言豊臣太
 閤の時明智討ちなどの作あり義残後覺小三味線
 鼓より大踊をまゐる事あり此書も文禄五年の跋あり醒醉
 笑永禄よりありありの都の人東アキの宿あり仲居
 小相馴まゐるが別る時一志由のさみせん
 をつら^りたる物語あり又慶長の頃の物小
 多く見えたり仁勢物語むつかしと平家も
 知らず志やみせんも琵琶も小歌もいかで過
 てき恨のまけ草子慶長十九年雪の前三味線
 引く處小華美を盡せる三線の製作をいひ

さばかり世よりてちや^り器あるふ久仁が
 歌舞妓小いづまごころを用るずそを舞又猿
 樂等小倣ひする故あり云々

此小舉げたる諸説小據りて見せむ三味線ハ天
 文永禄の頃既小世小ありて人々もてや^り文禄の
 頃ハ誰も盛小用る^りやう小見ゆ然る時ハ前の
 諸書どもの説おぼつら^り琉球年代記より梅

津少将永禄五年小琉球より持歸せりと云々
 そも月琴より三味線小造りかへたるハ遙の後
 文禄中少将が子の石村檢校のの工夫小起むる

和訓掇中編
 さみせん 永禄の琉球
 師をかくらひしり
 世に世よりしとを
 寛永の風流の藝
 みのをいひせとて
 慶長二年校易
 林の節用集中
 小い来た三味
 線の名前
 世小稀とあり
 一り偶脱せり

絲竹初心集も文祿中又大奴佐の説并小竹豊
中石村云々とせり
故事の説小據りて永祿中泉州堺小渡りたりと
まとも始りて渡りたりともる器の斯く早く世
人の弄ぶべき謂まる

右の次第あるを以て諸書共も小年代ハまてて
合らず因て南蛮人渡来の方の考證をあぐづし
按むるは葡萄牙人西班牙人の渡来の初ハ左の
諸書の如し

○後太平記小云抑鐵砲来朝の所以を尋ぬる
小過ぎし文龜辛酉の秋南蠻國より日本小来

まを渡まといへども唯鐵筒のみありて技術
妙方を傳へざれをあれ何の益ありやと人皆
疑慮を凝らし鐵筒徒小朽ち失せぬとぞ聞え
けり

○重編應仁記小云抑此鐵砲といふ兵器ハ元
来異國より持つて出して本朝へ去る永正七
年始めて渡る玉薬三放つ宛てがひしとぞ

○九州記小云亨祿三年の夏南蛮船九艘豊後
の府内へ来る其船中へ明國の人三官といふ
者あり國主大友宗麟僧保首座へ命じて文字

を通過せしむ彼商人數多の寶を獻ず中ふ二三
尺許の火器あり其名を鐵砲と名づけたり
○流祖傳ふ云河内の人田布施源助忠宗天文
六年六月南蛮國ふ赴き砲術の奧秘を得て歸
朝せりあれを田布施流といふ

後太平記の文龜元年辛酉ハ永祿五年より六十
一年前あり重編應仁記の永正七年ハ五十三年
前あり九州記の享祿三年ハ三十三年前あり流
祖傳の天文六年ハ二十六年前あり此後天文弘
治永祿ふ亘りて南蛮といふ彼我の交通陸續絶え

ずして録せらるる暇あらず此の如くあるが故ふ
彼の天文永祿頃の書ある室町殿日記ふ三味線
を記せらるる南蛮人渡來の器として考證確たる
べし扱其國人其初ふ持渡りて諸人何とあはれ
びしを中小路ふや瀧野檢校ふや石村檢校ふや
いづれ琵琶の道ふ妙を得たる瞽師等が其器を
取りて琵琶の手ふて更ふ新手をも考へ出で、
始めて一の調曲とあせらるるべし或ハ其琉球
ふ渡れり
言ひ做すハ自ら南蛮ふ渡りし然して其傳來を
ものあるや知らずべりらす
と記すふ至り南蛮器といふを避けて琉球器ふ

寄せ種々、小所傳を作り做し、一切支丹禁令以後の事あるべし

扱又次、小琉球の本^地土^人より傳ふる所、小就きて考

證をあり、琉球へは却て内地より傳へしものあり

るべし、りの考へを述べ、現在琉球より此

器をサンセン^{三線}といひ、蛇皮線^{あどろ}、文字も

三味線と書けり、又前説、小天^{小照}る月、十五夜

が盛り云々の歌調を琉球より傳へたれ、琉球

組と名づくともあり、今琉球人、小聞けを彼地より

天^{小照}る月云々の歌調ありて、それを大和歌とい

中山傳信録三三三
見三

工五、四、真本、上
野、音、楽、學
校、三、身

ふとて却て器も歌も内地より彼地、小渡り、如

く、小言ひあせり、琉球人の著せし、三味線の書

ふ^工工^四といつゝあり、種々の歌調の譜を載せ

たるものあり、今其書の序文をあぐ、

○工工四の序、小云^{大里王子尚夫歌ハ人情嗟}

嘆の餘音より、三味線、小あらむん、む音節を

調和せし、あ、と、不能ものあり、我朝歌、三味線ハ

神代のむか、より始りぬ、と傳へ侍、と、其

詳かあるを尋ね究めが、と、末の世、小深く、此

道を得て名の傳、と、人々、夏氏、湛水、親方、を

屋嘉比守保
元年生安永
四年死

宗として毛氏良澤、向氏新里親方、蕭氏聞覺、此
次第を以て絃聲の統を傳へしとあり然し
其頃までハ書傳として無かりしが向氏屋嘉比
親雲上トシノ此道下手を下しといふ一を汲て
今ふかぞらへ當流の音節を志すべし初て
工工四を作り夫より向氏豊原里子親雲上、向
氏仲田里子親雲上、歌氏知念筑登親雲上、各相
傳へて後世の模範とあり云々

○同書又云夏氏湛水親方ハ唐名德庸、名乘賢
忠、幸地親方賢盈が次男あり大明天啓三年癸

天啓三年ハ元
和九年あり康
熙二十二年ハ
天和三年あり

亥六月十五日生、從尚豊様尚貞様迄御四代ハ
奉仕中畧 康熙二十二年癸亥十二月十日死去
壽六十一是絃聲の先師として極めて其妙を
得たりとぞ

温知叢書ニ
ハ水隨筆

作者詳不明
舟人三三三
年以後寛保
享和四年云
種彦三享保
隆大所書
人作

○嬉遊笑覽一本欄外書入る云ハ水隨筆ハ
西の窪三味線住せら朝山檢校琉球より傳へし曲
を覺えし由先年琉球人來朝の時連弾ツレビキを志し
りしが善く合ハシたりとて琉球人殊の外ハ感心
せしとあり日本の曲の彼の國ハ合ハシるを一
曲此方より傳へしとぞ三味線琉球より渡り

て當朝山五世の由夫故此檢校ハ押出して三
味線の家ありといふ尤俗曲をも弾けども今
の淨瑠璃小歌あどハ押出してハ弾かぬとあ
り其曲静あるものよて雅ありと云々

琉球人の所傳あどよてハ必ず三絃其初ハ中華
より傳來すあど記をづきガ如く思もろろハ其
詳あるを究めづといつり神代といふハ詳
あらぬをいふハ
ありの事其宗ありと稱する湛水親方といふ者ハ
元和九年ハ生れ天和三年ハ死せしあり其時代
を以て考ふも却て内地よりかこハ傳へ

てといて當きりともいふべし或ハ彼地よて内
地より渡り所傳を失ひしが故ハ其初を神代
よりといひ又詳ならずと言ひあしものよもあ
らん琉球といふハ内地交通の事を甚しく支那
ハ秘したるが故ハ或ハおとさくハ其所傳
も知るべからず又ハ水隨筆にも連彈の調善く
合つりといふ初より製作所同くき歌曲あ
る事知るべく然して内地の方流行大ハ旧け
をいよく内地より渡りものと定むとも決して
牽強といふべからずなり

三味線傳播の事

大幣
貞重三刻

三味線南蛮より傳來してより我が國の琵琶法師等がこれを新曲し上せせし年を追ひせし傳播せし事左の諸書に據りて其大略を知らる

○大奴佐ふ云堺の琵琶法師中小路云々ありより三絃よきはむる故に三線と然に云ふ其砌ハむぎと弾きて慰みとせしは暫くして虎澤といひし盲目をこれを弾きしはめ本手破手といふ事を定めて人はこれを傳ふ其後澤住といふ盲目ありてあそびを弾きおぼえ歌のせし弾き出したり夫より公家武家の内に賞翫さ

せたまふ方多くありて自らも弾かせたまふ其後ハ此器の緒をつけて首をかけし弾くを用とす其後平家の倂して浄瑠璃といふ物始まりつゝ語を出でたりしは琵琶を弾く如くの浄瑠璃といふ事をのせて三味線を弾きはしめたるハ澤住が為を所云々

○竹豊故事に云世事談に曰く三絃ハ云々或人堺の盲人中小路といふ法師を取らせし其頃虎澤といふ盲人本手端手の術を弾きはしむ慶長の頃角澤といふ法師琵琶の名人を

世事談の享保十九年叔菊岡活涼の近世事談の見

アソビが三絃を手練して小歌に乗す其比又浄瑠璃節出来たり此浄瑠璃のせひくく角澤が始あり云々

○又云浄瑠璃の濫觴ハ永禄年中織田信長公の侍女小野の小通云々浄瑠璃物語十二段を作る云々昔平家物語を琵琶小合せ語り例して岩舟檢校といひ琵琶法師音曲小達せし名人あるが此十二段小節をつけたり又瀧野檢校角澤檢校の兩法師三味線小合せて曲節を語りひろめけり天正の末角澤より

薩摩治郎右門海といひ者小傳へて傀儡始まる云々

○絲竹初心集小云石村檢校三味線を琉球の島より得て来り琉球組といふことを作りおけり弟子虎澤檢校小残らず傳へしうむ虎澤又組破手といふ事を作り出す虎澤より山野井檢校小傳授して世小廣まる云々

○下り竹齋物語天和三年三月云又あるをを見てあれを遊女ゆうらん集りて若き人々打まじり志やみせんこころはあけ竹や調べ

○此石村前の石村と時代異あり此術の名人あれを其名を假りしもの

山野井云々

〇
 笛庭雜考
 竹有物多三石村校
 校見藤原長時
 才年不系竹忍
 某右村を又程よ
 盟ほいとつまか
 あり

そへたる其中小石村けんげう参られて歌の
 調子を上よけを云々

〇松の葉小云三味線本手琉球組云々此七曲
 を本曲といふあり石村虎澤琉球國より相傳
 の上手をかゝり加つて一作とあり今の世に
 至りて三味線第一本手組の濫觴とあれり又
 新曲裏組ハ共小柳川檢校作あり云々

三味線

〇本手目録 本曲といふ

- 一 琉球組
- 二 鳥組
- 三 腰組
- 四 不祥組

- 五 飛彈組
- 六 忍組
- 七 浮世組

〇端手目録 新曲といふ

- 一 待つよござれ
- 二 葛の葉
- 三 比良や小松
- 四 長崎
- 五 下総ほそり
- 六 京鹿子
- 七 端
手かゝむら

〇裏組目録

- 一 賤
- 二 錦木
- 三 青柳
- 四 早舟
- 五 八幡
- 六 翠簾
- 七 ちよ

本手琉球組ノ一

〇比翼連理ヨノ天は照る月ハ十五夜が盛り

一はみかん

一字サゲル

あの君さまはいつも盛りヨリ

○又云彼の中小路より石村虎澤澤住相承け

つぎて寛永ノ攝州ノ加賀都ノ城秀云々

當道字記録
写本

○當道記録云中小路弟子を石村といふ石
村弟子を虎澤といふ虎澤弟子を柳川八橋と

いふ

○竹豊故事又云此浄瑠璃ノのせひくハ角澤

が始あり其後大坂ノ城秀ノ加賀市ノの二兩法

師此術を得たり後ノ江戸ノ立越え加賀市ハ

柳川檢校とあり城秀ハ八橋檢校とありル當

八橋檢校貞享
二年死す七十
餘京の黒谷ノ
墓あり

時八橋流柳川流と稱するハ此兩人が術あり

云々然レを浄瑠璃三味線ハ角澤檢校を元祖

とも角澤の澤の字の縁を取て後世浄瑠璃三

味線を産業ともる衆中竹澤野澤鶴澤富澤等

といふあるべし云々

○大奴佐ハ云寛永の初攝州加賀都城秀とい

ふ座頭兩人世ハ三味線を弾き出すル此堪能

あるハ古今ハ獨歩せり東武ハ大

家高門もてあそびものとして既ハ盲目の極官

小昇進す加賀都ハ柳川檢校城秀ハ八橋檢校

死 八橋貞享三年

万治寛文ノ神リ

とあるより今不至り三味線不於て柳川流八橋
流といふハあるあり其後出世したる檢校句
當の中不此兩檢校をあげむ程の名人あま
とあるとも先づ柳川八橋兩檢校三味線の曩
祖たり云々

○松の葉不又云寛永不攝州不加賀都城秀勘
能あらびあく九重不遊び東武不跪き官職不
昇進して加賀都ハ柳川城秀ハ八橋皆僧官不
准じて檢校不經上りけを此三絃の鼻祖兩
家の棟梁といふありける傳ふる所本手端手

新曲綿蛮として淺利檢校佐山檢校出田檢校
市川檢校朝妻檢校藤島勾當云々

○琴の塵の序不云三絃の中興ハ寛永の頃柳
川檢校攝州より出で、本曲新曲の組秘曲を
製せり又近き頃佐山檢校賀州より東都不出
で、始めて長歌を作せりソがれも今様をう
たひしより歌舞妓青樓の弄びといふあり云
々

右の諸書不據りて相傳の系を作きを次の如く
みして區ぶあり又嬉遊笑覽不中小路ハ虎澤が

初の名と聞ゆもあられ石村が弟子ありとい

大なり筠委雅考大弟子中小路を以て是は云ふと名を尋ね初集子持を弟は

大奴佐 中小路一虎澤一澤住

竹豊故事 中小路一虎澤一角澤柳川

絲竹初心集 石村一虎澤一山野井

松の葉 中小路一石村一虎澤一澤住

當道記録 中小路一石村一虎澤柳川

されど兎も角も中小路石村を此道の祖と

し始めて曲を出せしを本手琉球組と次小虎

澤出で、破手組を作して此術を定め澤住角澤

注園玉註多き
三信二上りをえと
ゆりやめし
石村ヨリ三代目挾山
檢校(直言元保向
の人)本調子の外
二上り三上りを工夫
せしと云はれり

出で、浄瑠璃のせひく事として漸く盛あり

然して柳川八橋に至ると此道大成一般世小

ひろまりしものと見えたり

○聲聲曲類纂小曰く凡そ三絃の濫觴諸説を案

考するに何れもひとからずされど専ら世小

行をせしハ寛永の比より盛ふありてその頃

ハ専ら贅者の業として酒宴遊興の筵ふハか

らむ其伎不堪たる盲人を招きて彈き歌もせ

しを後より貴賤男女自ら彈ト自ら歌ひても

てもやせしうむ三都其外も名人上手競ひ

起りて枝葉を分ち流派をありて殊小盛よ
ありなり

○骨董集文化十年四冊山東京傳云元ハうたひものを
主として三線ハありらひのみよて今の如く引
く手の志げきものふああらざるよーそのゆ
ゑより撥の形も今と異あり元琵琶法師の手
より出でしとあるをさへあるべし

製作の事

三味線の製作も亦古今よて少差あり今諸旧記
の傳ふる所を掲げて後小現在の製をあげん

○琉球年代記云石村檢校月琴の秘曲を父
母より受け得たりしうむ其形をものむき
て丸胴を角胴小製ハハツ乳の猫の皮をもて
両面小張り月琴の意を以て海老尾小月の形
をのぶす云々琉球よてハ椰子をもつ胴を作
り薄き板よて裏を張り蛇皮をもて表を張る
云々

○竹豊故事云永禄五年三味線始めて琉球
より渡り云々其砌京都小名を得し琴琵琶の
細工人亀屋市郎右衛門石村といひ者此三

絃を摸し作出せり琉球よの三絃の胴を蛇の皮を以て張るといふも我が朝ふかゝる大
きある蛇皮あり依て猫の皮ふかへてあれを
張りたり云々現今時ふ船載せり蛇皮線といふもの三絃よして槽ハ三味線よりハ小く或ハ圓或ハ方あり柄杓の頭の如くふして面のみ皮よして張せり琉球より来たるハエラブウナギの皮ありといふ

○又云此三絃の形大體琵琶同ト惣尺三尺ハ天地人の三極を表し棹長二尺餘ハ陰陽の二氣海老尾の五寸ハ天の五星胴幅六寸ハ地の六合同長サ六寸餘ハ地の六種震動厚さ三

寸ハ高下平の三形を象せり轉手ハ絃手又天柱と書くあり是も天の象を表し反首も半月の形あり海老尾の絲巻ふ三台の星を象る云々

○又云當世の三絃ハ其形少く異りて惣長三尺一寸五分海老尾五寸二分棹長さ二尺五分胴幅六寸同長さ六寸六分天柱三寸五分あり

○絃曲大榛抄文政七年板三冊葛野端山編光崎檢校訂云三絃寸法古製三尺一寸五分新製三尺一寸五分と

穴ハ壺即ち押
處あり

骨董集ハ三味
線の古製を變
じて今の形に
作りかへしハ
古近江ありと
いへり

元祖と云ふは其所ハ
定かざるを實名を
ハ知れんと云

ガツソウ近江
ガツソウ善兵
衛と云ふ

り七八分までまぐてこれハ應ず但一穴指の

處にて棹の上ある所凡そ一尺九寸數七十二穴

○和漢三才圖會樂器部ハ云三線云々其棹以

花欄木為上如鐵刀木紫檀最愛標之美桑木次

之楮木為下品其皮皆以猫革ハ乳者為良狗子

皮為下

○嬉遊笑覽ハ云三絃ハ蛇皮を張りて製作

つゝのありしをいふが善く作りかへした

ふハ石村ふか志がたと見えたり古近江とい

へる匠の造るるを世ハ古よある寶とせり

元祖近江俗名源三京師の人あり二代浄本俗名

源左衛門始めて江戸に來る依て江戸元祖浄本近

江といふ寛永十三年歿三代道薰四代浄心五代性真

此時より始めて焼印を用る此者總髮ありて

ありけしむ世ハ總髮善兵衛其俗名といふ六

代本立七代相流八代倫超九代春峯俗名太世

ハ太兵衛近江と稱するあり天明七年歿十代

月峯秋元侯妙工の家の絶えんことを惜み此

時扶持せらるとあり右の焼印相傳へて六代

目頃心徳いたく損へるよりて七代目ハ今

の焼印ハ改めたりとぞ此家の風ヲて三絃の
 槽の裏ハ鼓の胴の鑄形ハ似せて綾杉トいふ
 紋の如く造シり焼印ハ根緒をかくる所の下
 小押をハと常あり焼印あるハ古近江ハあら
 ばされども太兵衛が如き者ハ殊ハ名手の聞
 えありて祖先ハ耻ぢさるものあれハ新古を
 もて巧拙を論ずべきハあらハず南畝老人が假
 名世説補ハ古假
近江と称スるハ二代目善兵衛が事ありとせ
 らハいと妄あり又柏屋近江とあるハ初號ハ
 たらハと

○聲曲類纂ハ云古近江ハ石村源左衛門と號

柏屋ハ石村ハの
 誤リ也

○中古鼓の胴の細工人ありハが三味線の胴
 をハ作りあらハひ其音色殊ハうハりハかりハ
 かむせハ古近江ハが三味線ハとて賞美せられハ
とハりや近代風雅百人一首ハ古近江ハ元柏屋
 江戸ハ名ある鼓の胴の細工
 人ありとあり
 ○按むハ小竹豊故来ハ三絃の創工を亀屋市
 郎右衛門石村とせり石村ハ実名ありや
 や苗氏あり近江ハ
 家も前の如く石村を苗字トす石村檢校の子
 孫ありハ又ハ其家の稱を承けつぎたるハや
 大奴佐小柳川八橋三味線の祖あり是ハより

柏

柏屋、江戸本町
十軒店、住かり

て今世三味線の工人、八橋の柳川のといふ
も此名字をゆゑられたるものありと見ゆ
れと同日の論り又琴曲抄元録ハ後奈良院
永祿以前肥前の人賢順箏術を得て云々後
其門人僧法水といふもの武藏に至り還俗
て柏屋と號し琴絃を高つりとあり近き頃ま
で江戸まで三味線製作の家ハ石村近江、柏屋、
菊岡の三家ありき菊岡ハ後ハ柏屋より出で
たる家あり

○嬉遊笑覽又云人倫訓蒙圖彙ハ琵琶琴三味

線同職あり室町一條上ル長門、釜座二條上ル
近江、此外寺町處々ハありといひ江戶總鹿
子貞享四年刻琴三味線師京橋北一丁目石村此外
ハ石村河内、石村山城とあり近江ハ家京師ハ
もあまど名匠ハ江戸ハ出づるも風流徒然
草ハ何事も東ハ物いやしくふつゝりあれど
も近江ハ三味線ハ耻ぢずといひ江戶志也
みせん屋の申侍も近江ハ限らず何もの細
工人も外より勝きたり其故ハ江戸の繁榮ハ
付きれまの簾中奥方より高直ハかまもず

あまう打出を故小自然と其妙を得たり殊小
近江ハ古作の名人の鼓の筒うちのかんあめ
あど善く考へあやみせんの筒のうち小一つ
のかんあめを工夫したり是れ秘藏の事あり
此かんあめを何せのよりのをも調べもべる
と申しき凡そあやみせんハわづり三つ緒を
以て何せの調子をも叶ふあり云々近江が志
やみせんたるも善き調子ありといひり
かくあるハ總髪善兵衛あどの時をいふある
なり

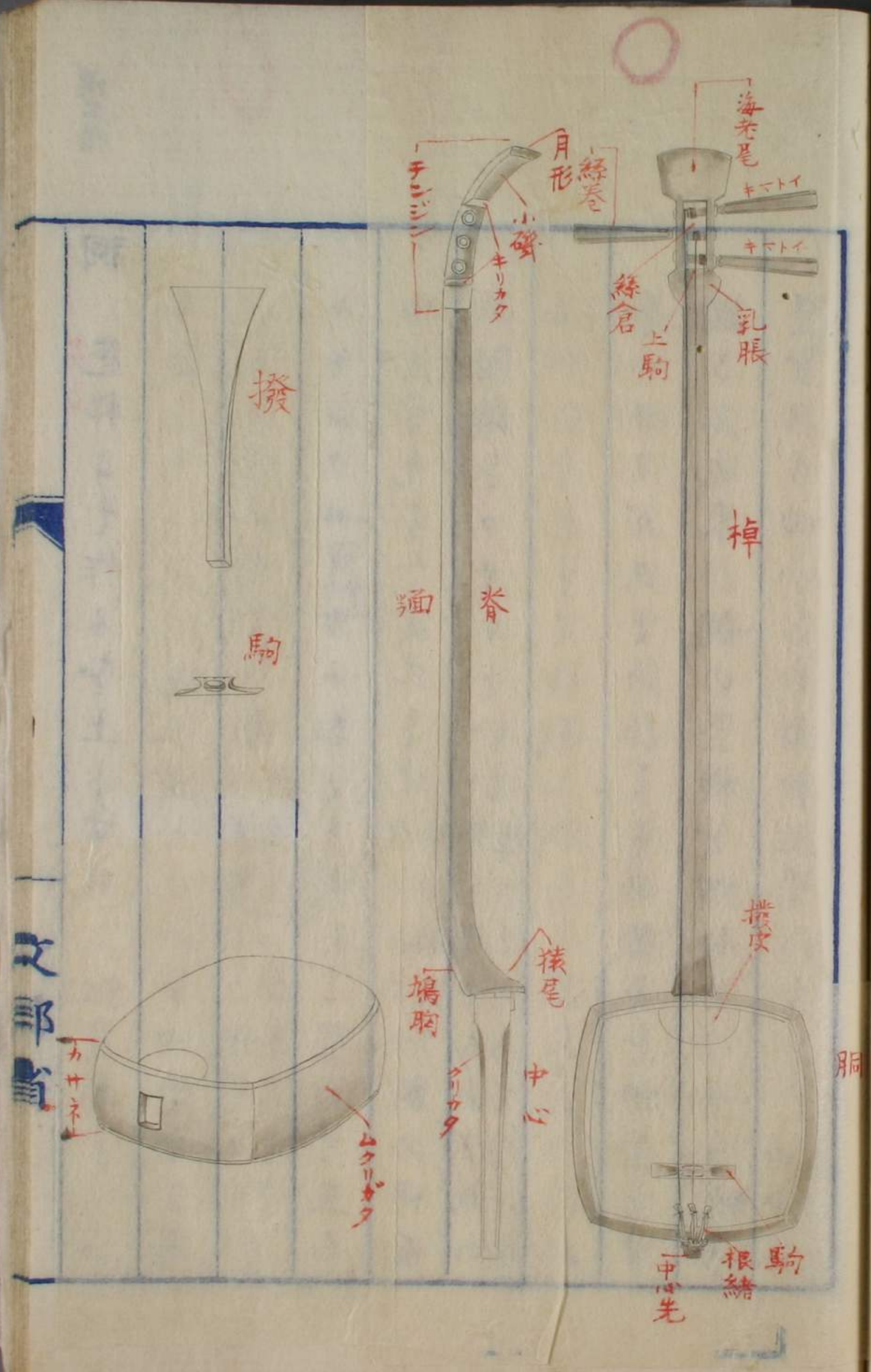
○又云楽器ハ其藝未熟ある者名物の器を用
るれむふさちかぬを常の器より鳴り
うらとぞ北窓瑣談小新九郎物語小六條本
願寺小近江の作の三絃あり類あき名器あり
折又借したまよりて是を弾くは少くも
無理ありて按へ所の坪厘毛も違ふ時ハ一向
小鳴らば弾きやうは無理あけもが神妙の音
を出る故小あやまち明白小聞えて耳小立ち
我あづき藝の不熟あるを覺えられて器は對
し辱かしく思ふといひり新九郎も三絃小取

骨董集ふ昔の
三絃根緒さき
小環をつけた
盲人の撥ふ
糸をつけて此環
ふ結び付けて
用ひと云

りてハ妙手として人皆知る所あり然るまかの
三絃あどハまど不相應ありと見えたり
○又云古畫に見えたる三絃ハ今の根緒かく
る所ハ金物の環ありあれハ大奴佐ハ此器ハ
緒をつけて頭ハかけて引くを用とすとあれ
むその為ハ設けたる物と知らる又撥のものと
ハ緒を付けたるがあり是も三絃ハ添えおく
ハ便利あり故と見えたり又三絃ハかせかく
るおとも古く見ゆ世話焼草明曆二ハ三味線も
年刻
月ハひかんの企ハかせや手車あらべ置秋又

四絃の古器集
古十種ハ別あり
申答の古器
周知

昔の三線今とハ形異あり棹ハ絲倉の所より
曲がりて海老尾の形あども劍先の如く
○又云榊菴談苑ハ續さみせむハ琵琶ハ續び
はあり長明方丈記ハ見えたり是ハより物
まやと思えられどさハあらず會律農家の四
絃の古器圍律ハ續柄あれハ三絃固より續ぎ
たハもありあるべしそハ調子の為めハ悪
しけむとまや近江が家ハ造らむと
○骨董集ハ云ふ古ハ撥の形幅狭く今と異な
り後ハ幅廣くありて古製の撥ハ無用のもの



三味線八王圖 寸法本文記 名稱

とありし故小婦人の筭の代りとして頭又さ
 したりといふ説ありさうもあるべし
 扱是よりハ三味線現立の製のものを擧げん古
 末の形ハ左小圖をハ長唄小用する所の製作
 ありまを唄三味線といひ又細棹といふ外小
 中棹太棹もあり棹の太さよ少差ありあり次小
 記をべし

文部省

文部省

胴

花^{ツクリ}柶^{ツクリ}をして作るを上とす殊^{ツクリ}は紅^{ツクリ}花柶^{ツクリ}としふ
 を最上としその舞^{ツクリ}木^{ツクリ}理^{ツクリ}としふを四傍面^{ツクリ}に用
 るるを賞^{ツクリ}す次^{ツクリ}より桑^{ツクリ} 八丈島より産むるハケ
 ヤキムクサイカチあども用^{ツクリ}る^{ツクリ} 堅^{ツクリ}六寸五分
 中五寸九分^{ツクリ}を定式^{ツクリ}とす 故に五分九分の稱あり 胴^{ツクリ}の両面
 の距離^{ツクリ}をカサネといひ 即ち厚さあれど板の厚さと分ちてしふを
 三寸とす其傍面^{ツクリ}ふ凸^{ツクリ}あり 凸あり 脹^{ツクリ}みあり しふを
 ムクリガタといひてその脹^{ツクリ}みを四分とす
 無^{ツクリ}る^{ツクリ} 小^{ツクリ}近^{ツクリ}來^{ツクリ}ハ 胴^{ツクリ}の堅^{ツクリ}横^{ツクリ}を旧^{ツクリ}製^{ツクリ}より一分^{ツクリ}約^{ツクリ}めて
 堅^{ツクリ}を六寸四分とし巾^{ツクリ}を五寸八分とし 四分ハ

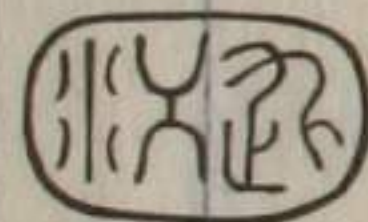
カサネを却て一分程深めて三寸一分とせり
 蓋^{ツクリ}し發音^{ツクリ}小^{ツクリ}佳^{ツクリ}ありとし小^{ツクリ}胴^{ツクリ}の材^{ツクリ}の裏面^{ツクリ}ふ鑿^{ツクリ}
 痕^{ツクリ}を加ふ しふを 綾^{ツクリ}杉^{ツクリ}とし小^{ツクリ}音^{ツクリ}を反響^{ツクリ}せしむ
 る所以^{ツクリ}あり

古^{ツクリ}近^{ツクリ}江^{ツクリ}燒^{ツクリ}印^{ツクリ} 聲曲類纂

同上

綾杉の図
ハミ入ル

石村
天下
源左



此印初代ヨリ
五代ニ用ル

膝横 牝
上
膝横 故

皮 牡猫の腹皮をあり極めて薄く製す色純

白あり江州の産を第一とす腹皮一枚乳八

つありあれを兩断して其一を用ゐる上部を

上等とす下部を下等とす臍あり各乳四つ

ありて面は現るるこれを四つ乳といふ名器

面ふ八つ乳集まりたる皮を張るる又下等

あるハ犬皮を張る一匹を八枚を取る其

部ふ因りて上下あり又裏皮より多く猫皮の

下部をも用ゐるれどあれハ犬皮の方つよく

て宜しといつり皮を張りつくるよふ餅糊を

用ゐる張る響の好き間も十日の後より三

四十日を限りとす因りて一芝居居の稱あり

一度の興行凡そそれより後ハ響衰ふ

三四十日間三撥皮ハ琵琶面あり洞の表面棹端ふ

て線の下より稍下部片寄せて張る半圓形

よして即ち撥の端の皮は當る所あり皮ハ極

めて薄きを貴ぶ故ハ子猫の皮を用ゐる

棹 轉軫紅木と共紅木とて造るを最上とす紫檀

の中渡りと稱して色黒あるものあれふ次

ぎ又新木と稱して赤あるを其次とす下等

ちるハ赤檜イスあどを用る棹の面ハ平
りあれをツラといふ背ハ圓脊といふ上部
の乳脹チクウ後シノの中ふ入る部をシコミといふ下
部の胴ふ接する所曲まり其面の部を鳩胸トウネと
いひ其背の部を猿尾サレビ心ココロふ接す中といふ皆其
形ふ因りて名づく棹の全尺を乳脹の上端より猿尾の下
底ソコふ二尺〇六分を制とすちる棹ハ一木ふ
て作るを最も音を發するふすといふされど
携ふるふ便よせんが為ニ繼棹とて取放し又
繼ぐべく作るあり二つ折三つ折あり

棹の太きふ三種あり

細棹 唄三味線ともいふ長唄琴唄あどふ用
る者あり其面上の方より七分下の方より
七分五厘

中棹 豊後三味線といふ常磐津節富元節清
元節ユラ後節シノといふ総稱ありて等ふ用る其面上ふ
て七分五厘下より八分

太棹 義太夫三味線といふ義太夫節ふ用る
其面上より八分下より九分あり

中心ナカゴ 棹の下部より細くして胴の内ふ貫き入

る所の名あり多く別木ふ其中部の縁を削り
削るあれをクリカタといふ中心の長さ七寸
五分其尖五分ハ更ハ小胴を貫きて外ハ出づ此
部を中心先といふ或ハジンドウともいひ中
胴先又ハ胴先あどいふ工人ハモチダシとも
いひ此ハ根緒をかくるが故ハ又ネヲカケの
名もあり

轉軫轉手の音を訛る小當字せしめらん
の上乳脹長さ一寸五分より絲倉長さ九分海老
尾長さ二分至るまでの総名あり総長さ五寸

二分あり工人ハあれをアタマあどいふ棹と
一木ハ作るを佳れども多くハ別ハ作りて接
ぐされど同木を用ゐるあり此部ハ棹ハ接を
る所より次第ハ背ハ反る

乳脹 訛して乳袋ともいふ棹の上部と絲倉と
の間左右ハ圓く脹を張る所あり其中央ハ
棹の上端のシコミヲ挿入る此處の面も
いさゝかある脹みありこれハ絃のサハリ
糸倉義あり座の乳脹の上より中央ハ長方形
孔を穿てる所より左右ハ各三圓孔ありて絲

接

巻を貫く所あり、此所左右の外を剝り込みて
乳脹海老尾よりハ中狭くその割き込込みの所
をキリカタといふ

海老尾ウラビ 絲倉より上の總名あり此部中廣く更

に背ふ反ソ刈カへル形伊勢海老の尾ノ似たり

其端半月の如き所をツキガタといひ其左右
の邊を磯イソといふ

絲卷 本名を轉手といふ絲倉を貫きて絃の上
端を巻きつけ旋轉伸縮して貢高低の律を生ぜ
しむるものあり孔アナ入る所圓くして三箇あ

漢名轉手或
も軀
三入端
孔の外ハ角三作
角ハ擗リマハ三カ
アラシムルナリ

り上あるハ右より左ノ貫きこも第一絃を
かく中あるハ左より右ノ貫き第二絃をかく
下あるハ右より左ノ貫き第三絃をかく黒檀
みて造るを上とす象牙ゾウノクハも作ネもど音締ネふ
悉ツ又タガヤサンノも作ネ下等あるハイ
スあど用るる

駒 胴の皮の上根緒の方ノ寄せて急キ絃を受

る座のあり上等あるハ玳瑁象牙あどみて
作り常トハ水牛角あど用る下等あるハ竹又
たツゲあり幅の狭きを細駒ホコといひ廣きを臺ダイ

護

廣と中の稍狭き小細棹、中棹、太棹、各其

其程度又合もせて用ゐる駒の位置も調子の條ふい

上駒 乳脹の上端より絲倉の縁に貼りて動か

ず上等ありハ銀象牙より作り下等ありハヨ

レサカあり中七八厘、高二厘許、第二第三の

絃を受け第一絃の處を一分許欠く

絲 第一絃太く第二細次ぎ第三絃ハ甚だ

細し生絲より繕り作る京都の製を上とす秘

録五小琴三味線の絲ハ近江の日上州の産也

切村の餅の糊よりよるとあり 或ハサラシ

とハハ色白く扱絃の種類九種ありその名

目次小擧ぐるが如く是れ絃の細きより太き

小次第あるよりて此差あるあり其細太所用の理を

調子の條然して此名目ハ皆第三絃の量目小

てハハものより第二絃ハ第三絃の二倍より

て第一絃ハ第三絃の三倍と知るなり又絃の

長さ七尺ハ丸を九掛といふ常ニ丸を中分

掛と一掛といふ

百々 最も細きものハ稱あり即ち百掛より

十々と稱もいづきハ稱呼の便ありハ千掛の目方

より百掛といふ

解

十二 百掛より目方十二寸あるもの、稱あり前のもよりハ二寸重しその重さ

以下十八寸至る四種小各並と本との二種

あり本十二寸即ち十二寸あり

十三 百掛より十三寸あり

十五 百掛より十五寸あり

十八 十八寸あり

二十寸 二十寸あり

二十五 二十五寸あり

七五 三十寸あるものをかく稱せり次の八五と共又其稱の所以を知らず

八五 三十五寸あり

百寸、十二、十三、十五を細棹小用る、十五、十八、二十

寸、二十五を中棹小用る、二十五、七五、八五を太棹

小用るあり、十五と二十五とを中間ふありて

根緒 中心先小掛け其端三つは別き三絲の

下端をつちぎつるものあり絹の組絲にて

作る

撥 象牙、水牛ふく作る紫檀あるもあり下あり

ヒ、ラギ、ツゲ、カシ、みく作る形、大き圖の如

太棹より細棹中棹

印 一字サカ

漢名同撥

胴掛 錦華ビロウドあどりて作る胴の一面の

立てゝ右手ふ當る所を被ふ腕の直ふ皮ふ

轉軫掛 製胴掛ふ同ト海老尾の月形の處ふ被

ふ藏をも時缺損を防ぐ為りす

調子の事 此條ハ多く大槻修二が著
むせり三味線譜ふ據る

ラベイカの調ハ前條よりいひく如く一ハ壹越

ふして二ハ黄鐘三ハ平調あり今の三味線の調

みていへむ二上り調子の如くみして平調のみ

二調高し線竹初心集ふ石村檢校琉球より始め

て小弓を搜りみるふ線の調べやう一二ハ琵琶

の如く三の絲ハ琵琶の三よりも二調程高く合

てせたるものありとありを雅樂の壹越調みて

見るふ三の絲のみ尚三調程高くせむせんふ今の

三味線の三下り調あり今の胡弓ハ常ふ三下り

調を用ふるあり同書ふ又石村弟子虎澤云々虎

澤より山野井檢校ふ傳授して云々絲の合をせ

やうハ是も一二ハ琵琶の如く三の絲ハ琵琶の

四の絲の調子ありとありを亦雅樂琵琶の壹越

調みて見むは是も即ち今の三味線の本調子を

り蓋し虎澤が破手組を定むるふ及びて始めて

狹楯板ニヤリ
三下り始め云々ハ
ドイカハ

三台星上台と虚
精といひ中台を陸
順といひ下台を曲
順といふ

本調子の出でたるものうかく後出でたるものあれども和漢律家のいもゆる宮徴の和合音より作りたるものあれむやぶて本調子といふ名づけしあらん

竹豊故事より一の絲を虚精といひ二の絲を陸
淳といひ三の絲を曲順と號す十二調子の内壹
越断金平調勝絶の四つを一の絲の中ふ兼備へ
下無双調鳥鐘黄鐘の四つを二の絲ふ兼備へ
鏡盤涉神仙上無の四調子を三の絲ふ兼備ふ云
々といへり

工工四小據をも琉球よりハ一の絲を男絃といひ二の絲を中絃といひ三の絲を女絃といへり
扱現今の三味線の調子を説かんとするふ當り
て初は先七音十二律の事を大略ふ述べん自然
の音聲を宮高角徴羽の五音と一その宮と徴と
ふ又正と變の二音あれを合ませ七音なり又
音聲の高低を次第をもものを壹越断吟平調勝
絶下無雙調鳥鐘黄鐘鏡盤涉神仙上無の十二
律と一此律ふ又甲音乙音兩律ありて二十四律
とある
三味線
を或ハ
製
替
と
ハ
甲
乙
の
事
十二律ハ壹越ふ

始まりて上無ふ終るといへども乙音の上無ふ
 次ぐものハ甲音の壹越あり故に第一圖の如く
 循環して止まざるを猶環の端なきが如く
 して更ふ三十六律とあり又四十八律とある
 至る

十二律に因りて七音を定むるより宮を基とし
 高ハ宮より高きと二本あり羽ハ徵より高き
 こと二本あり然りて變宮、變徵ハ其正音より低
 きと各一本あり爰に一本二本あるといふハ十
 二律の次第より壹越を一本といひ斷喙を二本

といひ以下其次第より十二本に至る稱呼あり

第一圖



五音
 十二律
 合調
 之圖

幅
た
4
子
あ
る

第 二 圖

五音 宮 商 角 徵 羽
壹黄 壹盤 壹平 壹雙 壹下

上無	神仙	盤涉	鸞鏡	黄鐘	鳧鐘	雙調	下無	勝絶	平調	断吟	壹越
十二本	十二本	十本	九本	八本	七本	六本	五本	四本	三本	二本	一本
下無	勝羽	平下	断勝	壹平	上断	神壹	盤上	鸞神	黄盤	鳧鸞	角雙 微黄 鐘調

宮、徵の兩音を和合音とせ其音小高低あれども
 相親和して其調を同ぼうも此和合音を第一圖に
 就きて定むるを左より環りて第八小當り右よ
 り環るを第六小當り故に順八逆六の稱あり
 即ち圖の如く宮を壹越と定むるを徵ハ黄鐘を
 り又下無を宮とせれを上無ハ徵あり若し黄鐘
 の宮あれを平調の徵あり餘ハ此理を推して和
 合音を知るなり

十二律小各甲音乙音あれを二十四律とあり又
 三十六律とあり四十八律小至る然れども三味

例

第 主 圖			
變	調	正	
一下り	三下り	二上り	本調子
角	徵	徵 _{乙音}	第一絃
宮	宮	高	第二絃
徵	角	徵 _{甲音}	第三絃

三年の語あるに至る其學び得て能く調子を合もをもるを得るを絲道があくといふされど其宮徵等の音の基を知らんとせむ十二律管の調子笛といふものありてこれを吹きて合もをれを其基音を得知れり

文部省

線の如き其器其律不堪へざれば通常二十四律を定限とせりされど下の壺の條より如く三倍の甲音を發するを得べし
 三味線の音律を定むるを調子を合もをもといふ其調子正調三種と變調二種とあり正調ハ本調子二上り三下りあり變調ハ一下り或ハ三上り三三下りありされど變調ハ常ハ用ゐるふとあり尚次の圖ハ就きて知るべし
 従來の教授する法の定むる無く只自然ハ覺あるも任も故ハ學ぶふと殊ハ難くして調子

文部省

調	三三下り	徵	宮	商
---	------	---	---	---

本調子ハ第二絃を宮と一第一絃を徵とす即ち
 宮と徵との和合音あり第三絃ハ第一絃と同ト
 く徵ふしてその甲音あり然る時ハ第一絃本調
 ハ徵のハ音あり
 子ハ此の如く宮徵の和合音を得るものあれど
 正調中の最も正律あるものとして本調子の名
 あり
 二上りハ本調子みして其第二絃のみを二律高
 くして高ふあぐるものあり
 三下りハ本調子の第三絃のみを二律低くして

角ふさぐるものあり
 其他の變調二種ハ第三図ハ就きて各其異あり
 所あるを知るなり
 又上調子ウヘニといふものあり或ハ高音ウヘともいふこ
 とも二絃の三味線を合奏する時ハ甲音乙音の
 調子を互ハ用ふるものとして其兩絃ハ必ず其調
 子を異にして打合えざるあり即本調子ウヘハ二
 上りを上調子ハ用ふる二上りウヘハ三下りを用ふる
 三下りウヘハ本調子を用ふるあり
 右の上調子を弾むるウヘハ常ハカセといふもの

を用ゐるありこれハ箸の短きが如きものなり
 棹の乳脹の下數寸調の高低因りて凡そ一寸
 の處より絃上より五寸まじりの間とす
 して夫より下より聲を發せしむるものあり

調子	第一絃	第二絃	第三絃
四分	斷喙	鳧鐘 <small>乙音</small>	斷喙 <small>二本</small>
六分	勝絶	鳶鏡 <small>乙音</small>	勝絶 <small>四本</small>
八分	双調	神仙 <small>乙音</small>	双調 <small>六本</small>
一本	黄鐘	壹越 <small>一本</small>	黄鐘 <small>八本</small>
三本	盤涉	平調 <small>三本</small>	上無 <small>十二本</small>

圖	五本	上無	下無 <small>五本</small>	上無 <small>十二本</small>
七本	斷喙 <small>甲音</small>	鳧鐘 <small>七本</small>	斷喙 <small>甲音</small>	

調子ハ正変五調あれども絲の細太と歌聲の高
 低と小因りて音律の高下を定む第四圖是を
 一本の調子ハ第二絃を壹越小定むるものあれ
 ば第一圖の如し故小第三絃より八本とす
 黄鐘ハ八本
 小當りあり
 三本とす一本の本調子を二上りとすれを第二
 絃ハ平調とあり其平調を宮とす第一絃第三

絃を盤渉ふ定むるものあり

五本七本も同理ありて又二本四本六本も皆同
ド但し六本以上の第一絃を甲律ふ定むるを第
三絃ハ随ひて其律ふ信する所の甲音ふ定むる
あり

四分六分八分ハ一本以下の名目ありて八分ハ
第三絃より六本の調子あり六分ハ四本ありて
四分ハ二本あり

一本の本調子を三下りふまを第三絃ハ双調
あり其双調を徴とまれば宮ハ神仙の乙音あり

こまを八分の調子とす

六分ハ八分の三下りを徴として第一絃を勝絶
ふ定め二を鳶鏡の乙音とす四分も同理あり

二上り三下りハ其基ともる所の本調子ふ因り
て其高下の名目を呼ぶふとまべれふ同ト
絲の最も細きものハ長唄河東節ありて三本
より五本ふ至る此外ハ通例男子の歌聲を六分
と女子ハ一本より三本ふ至る

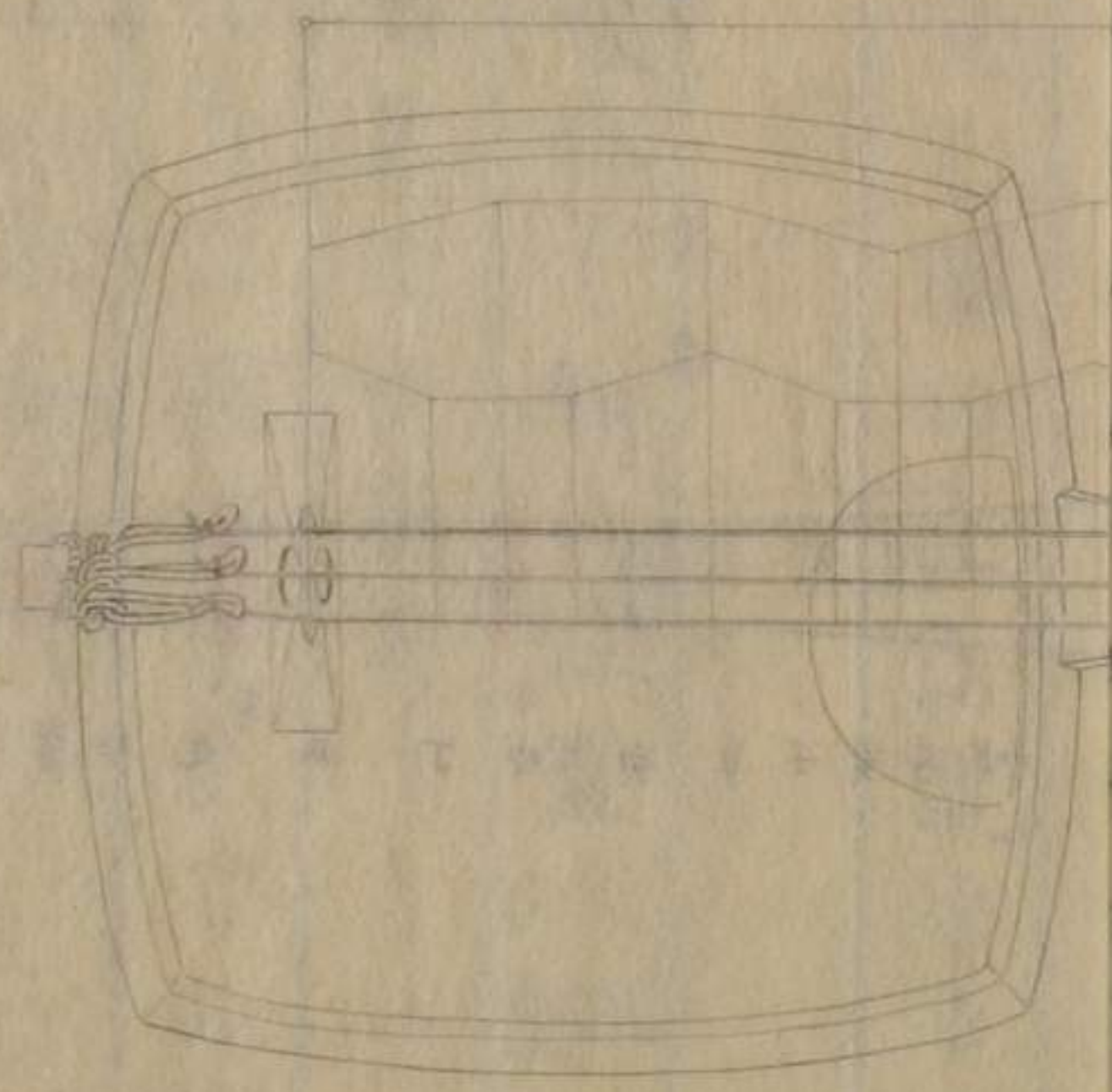
八本以上の上調子ふ用るものありて絲ハ百目
を用るる絲の事ハ
未だあり

細み細み

絃ふ又サハリといふ事あり即ち絃の餘音の味
 ひあり第一絃の上駒の上、絲倉の際ふ掛る處ふ
 微スく入りたる處あり又乳脹の平面ふ微スくの脹
 みあり絃を弾むれむ絃振盪して是等ノ部ふ或
 は觸れ或は觸るゝが如くして餘音を發するを
 り其餘音のよゝあゝをサハリガツク又ハツカ
 ヲといふ此餘音他の二絃も及ぶあり
 左手の指端にて絃を押して各律の音を發せし
 むふ處を壺ツボといひ又押處ドコロともいふ
人差指と中指とハ爪の
 尖を以て絃を押ふ
 を定法とす

第五圖 全形三寸

戊 十八分
 巳 八分五厘
 庚 十八分中
 辛 二十七分十八厘
 壬 二十七分中
 癸 二十七分十九厘
 斗 十八分十三厘
 為 二十七分二十厘
 中 四分の三



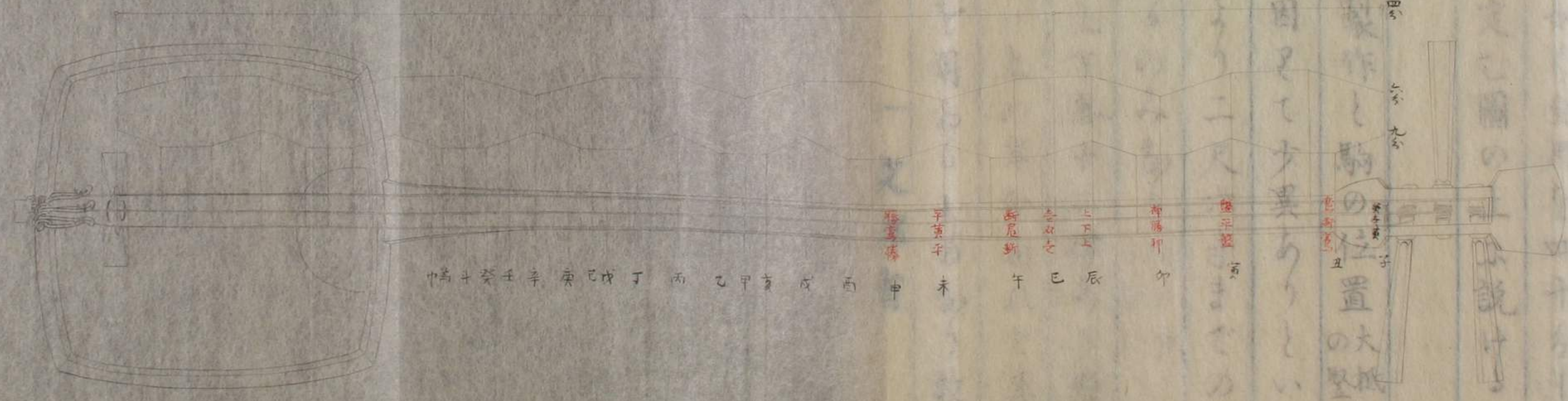
文部省

左手の指端よりて絃を押へて各律の音を發せしむる處を壺ツボといひ又押處カシドコロともいひ指人差指ササと爪の中ツメを以て絃を押ふるを定法テイポフとす

第五圖 全形三分一

壺ノ割方ワタリカタ馬ウマと上駒ウエコとを並置ナラバシ音の八五尺とを先づ其全尺を四分し毎分六寸とを二除す即八寸次又全尺を六分し毎分五寸とを三除す即八寸又更また全尺を九分し毎分五寸とを三除す即八寸

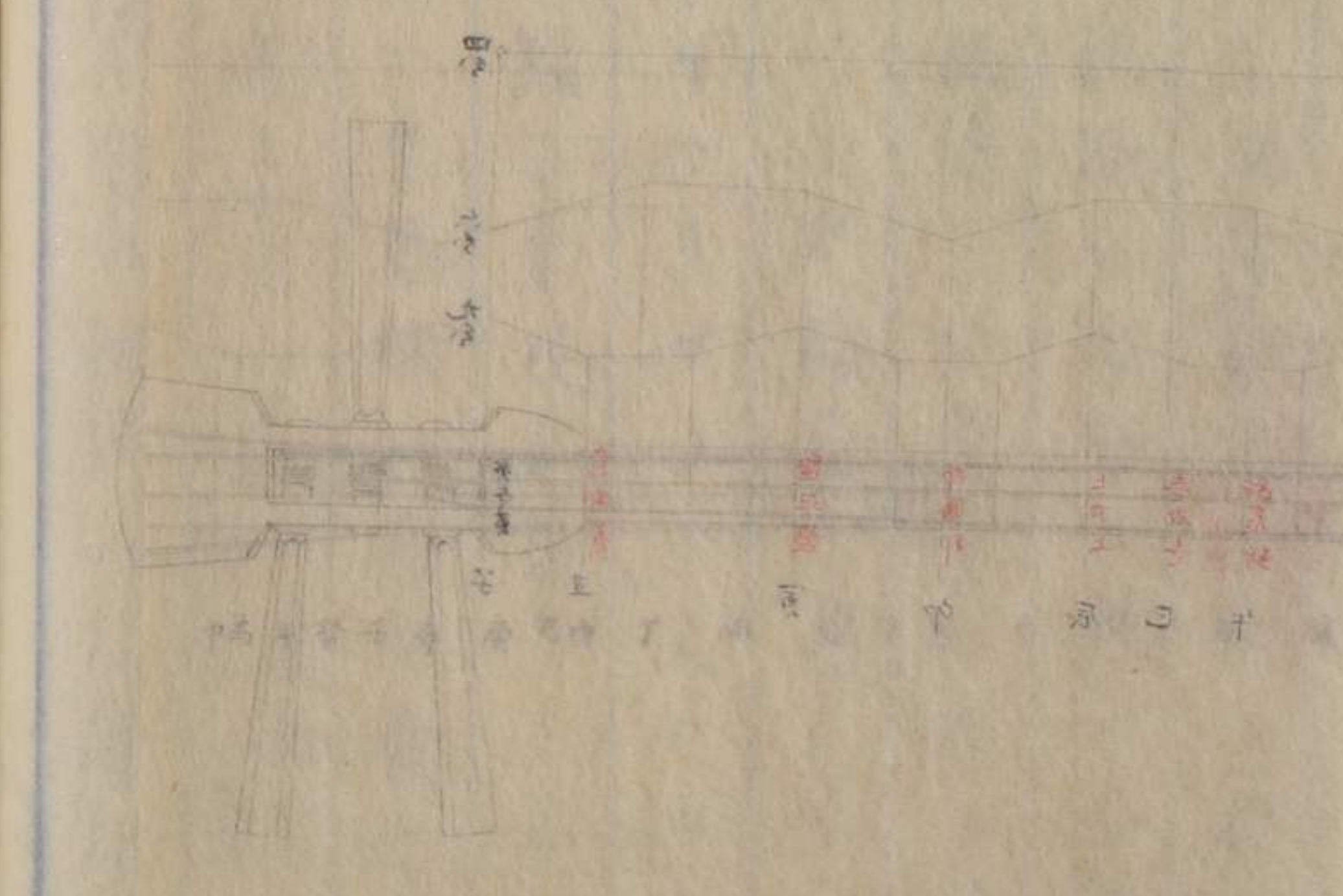
- 子 上駒を即ち散聲サンシヤウとす 二七分の一
- 丑 九分の一
- 卯 六分の一
- 辰 九分の一
- 巳 四分の一
- 午 八分の一
- 未 六分の一
- 申 二七分の一
- 酉 二七分の一
- 戌 二七分の一
- 亥 二七分の一
- 甲 四分二即六分三
- 乙 二七分の一
- 丙 二七分の一
- 丁 十八分中分五
- 戊 十八分中分一
- 己 八分五
- 庚 十八分中分五
- 辛 二七分の一
- 壬 二七分の中分五
- 癸 二七分の十九
- 斗 十八分十三
- 為 二七分二十
- 中 四分三



Handwritten red mark or signature on the left margin.

此の事あり即ち絃の餘音の味
 其の事あり即ち絃の餘音の味
 其の事あり即ち絃の餘音の味
 其の事あり即ち絃の餘音の味

又更に全尺の長短ハ其器の製作と駒の位置
 又更に全尺の長短ハ其器の製作と駒の位置
 又更に全尺の長短ハ其器の製作と駒の位置
 又更に全尺の長短ハ其器の製作と駒の位置



此壺の身法ハ第五圖の如く全尺を四十分して
 其内の二十四處を壺と定む圖の上ニ説けるが
 如し

此全尺の長短ハ其器の製作と駒の位置
 此全尺の長短ハ其器の製作と駒の位置
 此全尺の長短ハ其器の製作と駒の位置
 此全尺の長短ハ其器の製作と駒の位置

丁庚壬の三處ハ全體の割合の中ハ就きて更ニ
又其中分を用ふるものとき

壺の名ハ常ハ唱ふるもの甚だ少シ左の五稱あ
るのみ

丑 上カミとソふ

寅 上ウツ吟ギンとソふ 常ハ略稱して
ギムといふ

己 中地ナカヂとソふ 常ハナカと
のみソふ

未 中吟ナカギンとソふ

甲カとソふ

通例の壺を用ふる定限ハ第一絃第二絃ハ共ニ

申カ止トまり第三絃ハ申カ至ル 然シモ以下ニ及ブ

申カハ全尺の真中ニシテ即第三絃の散聲ヲ放ス

申カハ全尺の真中ニシテ即第三絃の散聲ヲ放ス 申カハ全尺の真中ニシテ即第三絃の散聲ヲ放ス

申カハ全尺の真中ニシテ即第三絃の散聲ヲ放ス 申カハ全尺の真中ニシテ即第三絃の散聲ヲ放ス

申カハ全尺の真中ニシテ即第三絃の散聲ヲ放ス 申カハ全尺の真中ニシテ即第三絃の散聲ヲ放ス

申カハ全尺の真中ニシテ即第三絃の散聲ヲ放ス 申カハ全尺の真中ニシテ即第三絃の散聲ヲ放ス

三味線
早稲草

光の戯言

坤

元治二年板

三義

柳屋三樂著



同音あり第三絃と合もせ弾くも同ト宮を壹越と定む

む散聲と共小第八の當る壺ハ黄鐘とあり即ち順ハの數あり

以上ハ一本の本調子に就きて説く所あり即ち

圖中は記す所の律名ことあり

二上りハ第二絃の己より第一絃と同音あり第三

絃も同ト

三下りハ第三絃の未より第二絃と同音あり第一

絃とハ寅は同音あり

他ハ三調子も此理に准むべし

絃を弾くも常日ハ撥の端より一線を下り弾

きおもせあり或ハ二線を連続して弾きおろすも

とありこれをジャン又ハジャンといふ又絃を

上り弾きあぐることもありこれをスクヒバチと

いふ此スクヒバチを細小頻數ヒキリをつらふをマハ

シバチといふ

又左手も種々の音を發せしむ小指或ハ紅

差指の端より絃を下り弾くことありこれをハ

ジキといふ又人差指以下四指の爪を連続して絃

を上り弾きあぐることありこれをウラハジキ

といふ又爪より絃をこきさぐるをコキといふ

又四指の腹より三線の絃を連ねて撃つことあり
りこきをウチと云ふ

春臺獨流

太宰春臺
字本二卷

云三線と琉球用の樂器

史館總裁

あそ慶長の頃とやえは國子付しと云ふ云、阮咸の遺制と云ふえ、三線と寛文地蔵の頃まで

圭小逢ひ

て調子ひきく引く手とまばらまて筑紫筆子類ひせり

下りなど

う長ふ唄と詞やさしく節しゆゆるそ俗調と云ひあが

これある

ひきげはくちかきと近き頃調子高く引く手と甚

を喜び候

せよくまうまううたふ歌と詞ゆるく拍子つま

て見候へ

ていそめそとさふむをうま

先年申候

て引かせ申候ふかく妙音出で申さむ候ひ

然る處近年何がと申座頭一下りの手を引出し殊の外おもしろき由頃日承り候といつり元圭ハ律小委と日本の律學取立てんとして故ありて打捨てたりとぞ

○又曰く三絃六筋かけハ原本洞房語園元文中庄

司勝富ふ慶安の頃江戸町二丁目の揚屋喜齋と

いひし者六筋がけとて其頃隱きと云ふ三絃の

上手ありし一代男艸子四こくたんつごま

の六筋がけを取出し云々らうさいその聲の

美しき西鶴置土産五番町ふさる御方の隱

又四指の腹より三線の絃を連ねて撃つことあり
りこまをウチとソム

○嬉遊笑覧云曰く一
下り調子水府史館總裁
日てあり一
小池源太左衛門中根元圭
不逢ひて音律の事を聞きける時
二上り三下りなど三絃
ふ申候一上り一
下りと申事もこれあるづき
ふ未だ承もらず如何と申候
つを喜び候て申候ハ一
下りの調子の音曲を引て見候へ
て銀座のよほど三絃ひきの者へ
先年申候て引かせ申候ふ
かく妙音出で申さむ候ひ

一然ら處近年何がと申座頭
一
下りの手を引出し殊の外お
とろき由頃日承り候とい
つり元圭ハ律ふ委く日本
の律學取立てんとして故あり
て打捨てたりとぞ

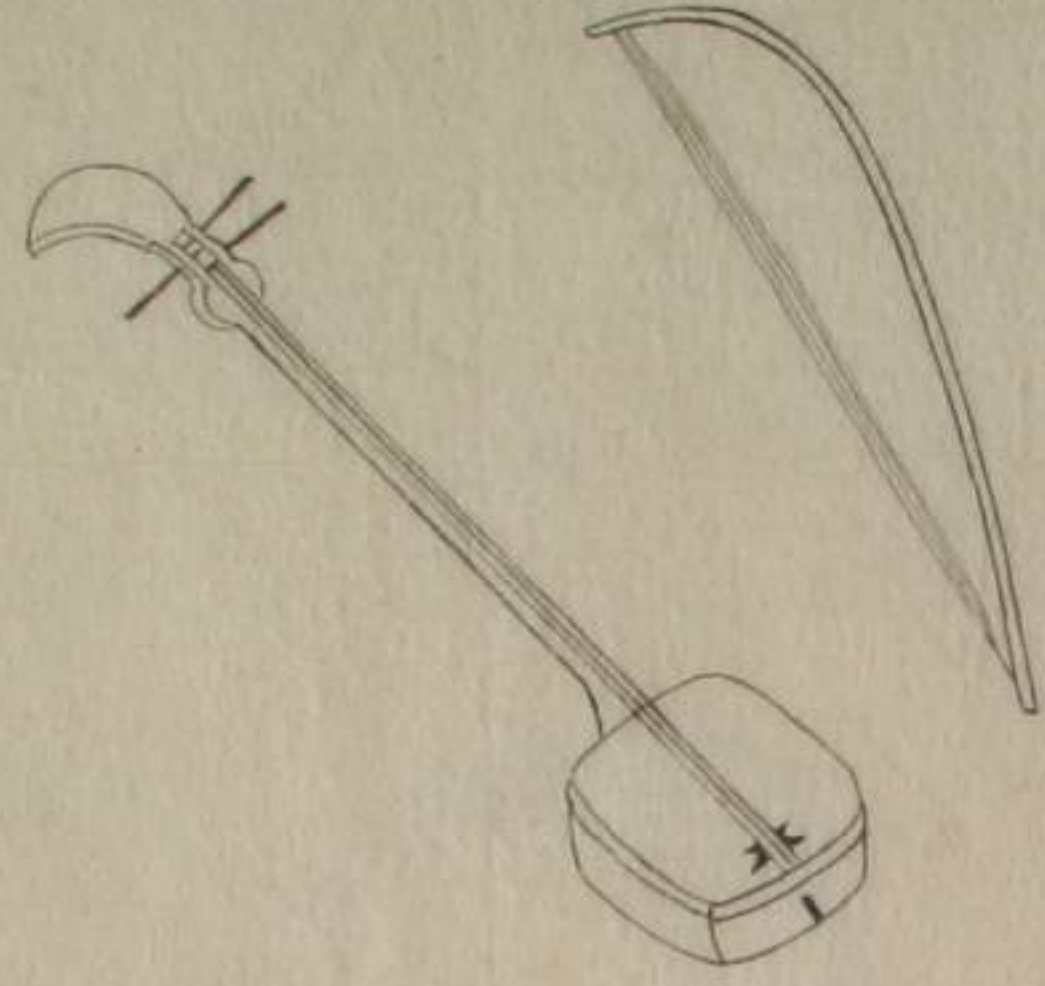
○又曰く三絃六筋かけハ
原本洞房語園元文中庄
司勝富ふ慶安の頃江戸町二丁
目の揚屋喜齋といひ一者六筋
かけとて其頃隱きある三絃の
上手あり一一代男艸子四
こくたんつごまはの六筋
かけを取出し云々らうさい
その聲の美く西鶴置土産五
番町ふさる御方の隱

藝ふ八筋がけを志のびごまよ引かせらまじ
が又も無き音曲是を役者の九兵衛が御指南
うけてまあび是は本手小歌あど見えさう
かく八筋がけあど事つふもあつをおもつを絲
のさらふとさして三線の棹も大きあつをい
ふもやあらん云々

○聲曲類纂ふ曰く中古三味線ふ何筋がけと
いへるひき様あり洞房語園よ吉原揚屋町の
喜齋六筋がけの名人と記し西鶴置土産ふ八
筋がけの忍び駒と見し事又東海道敵討と
まといへり

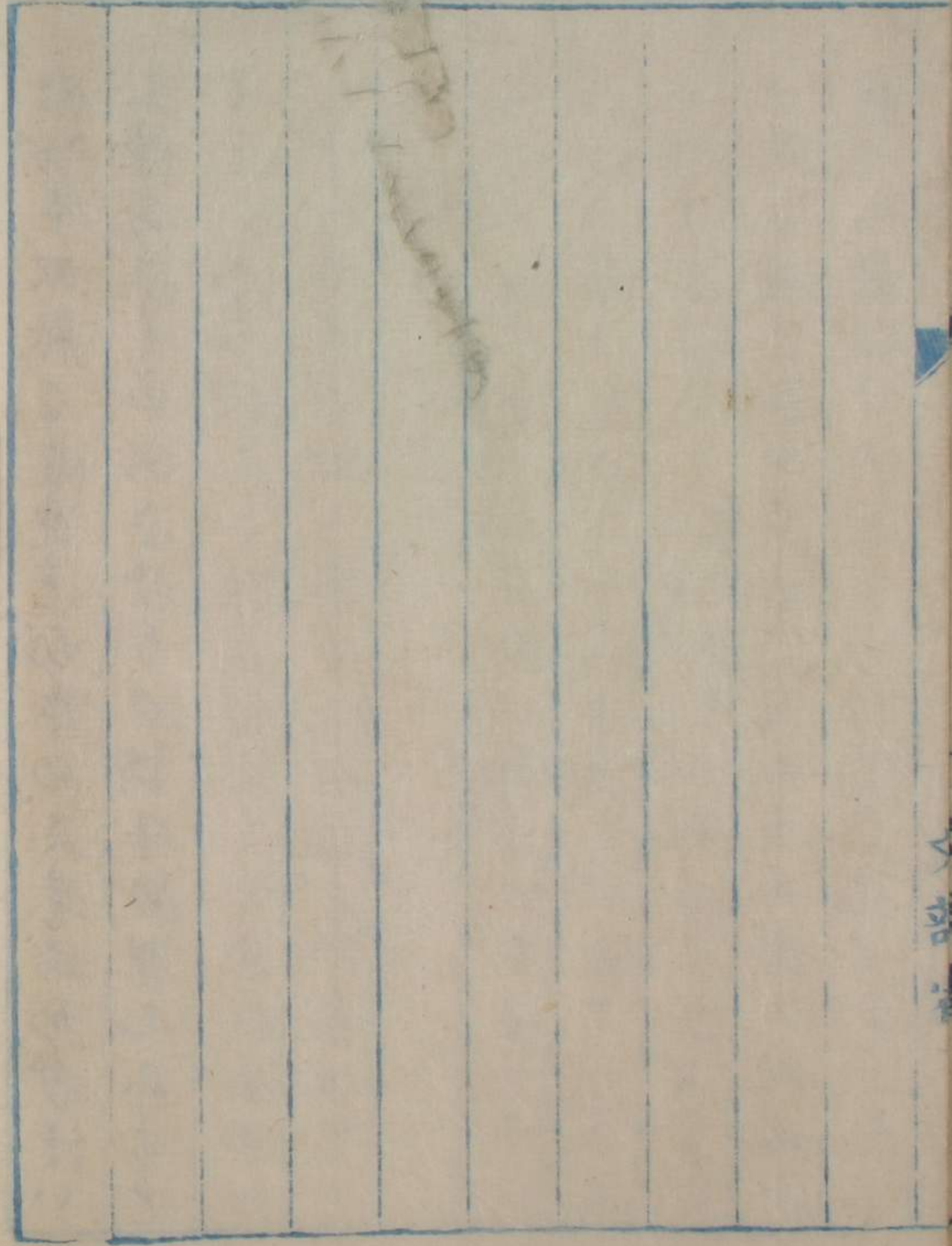
鼓弓

和漢三才圖會 十八



鼓弓

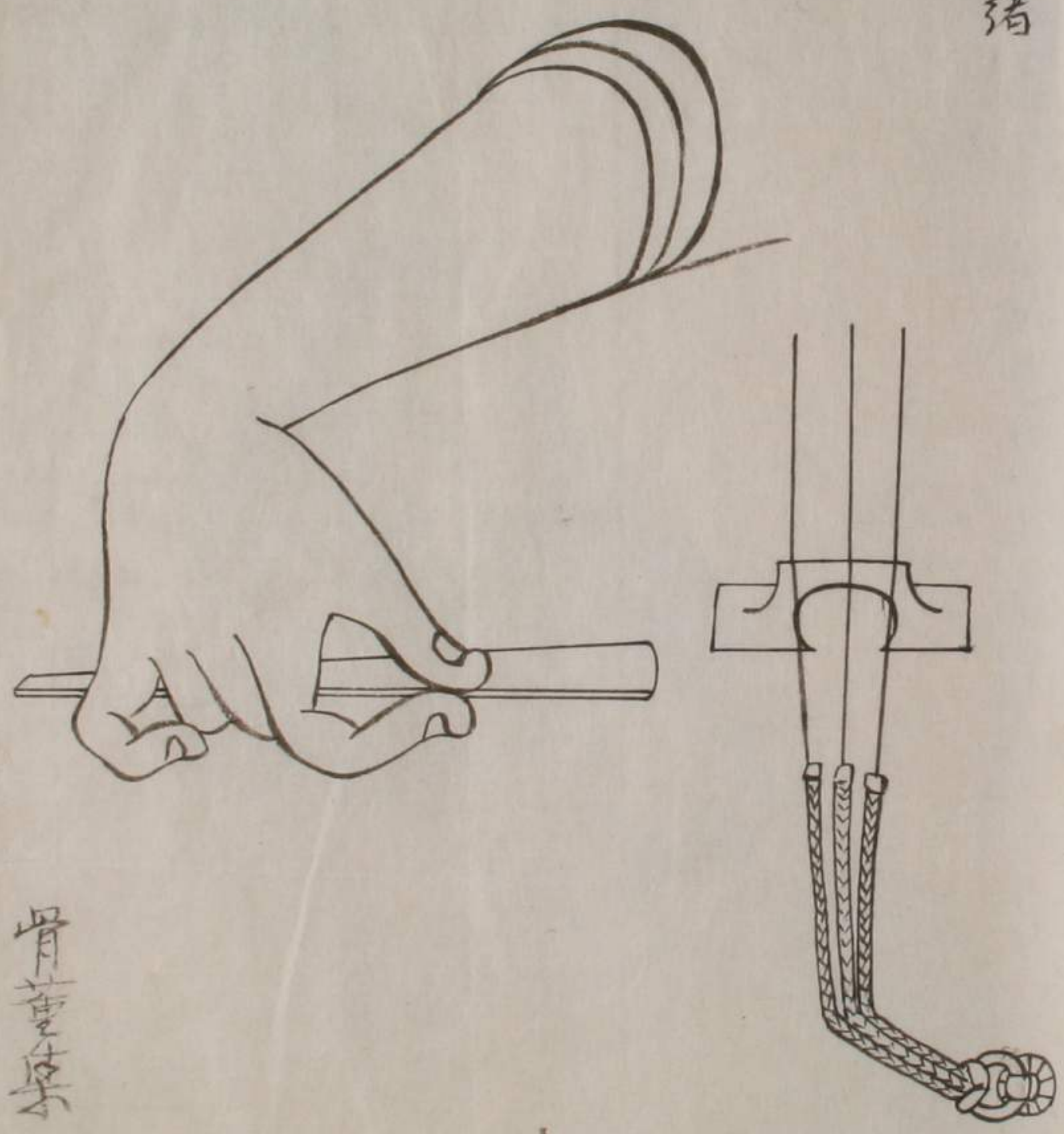
寬永三保年回古画
骨董倉本上巻中



三絃
 竟承正保句向古画
 骨董集上編中
 文政十有年
 山東幸信



古撥
 根緒



骨董集

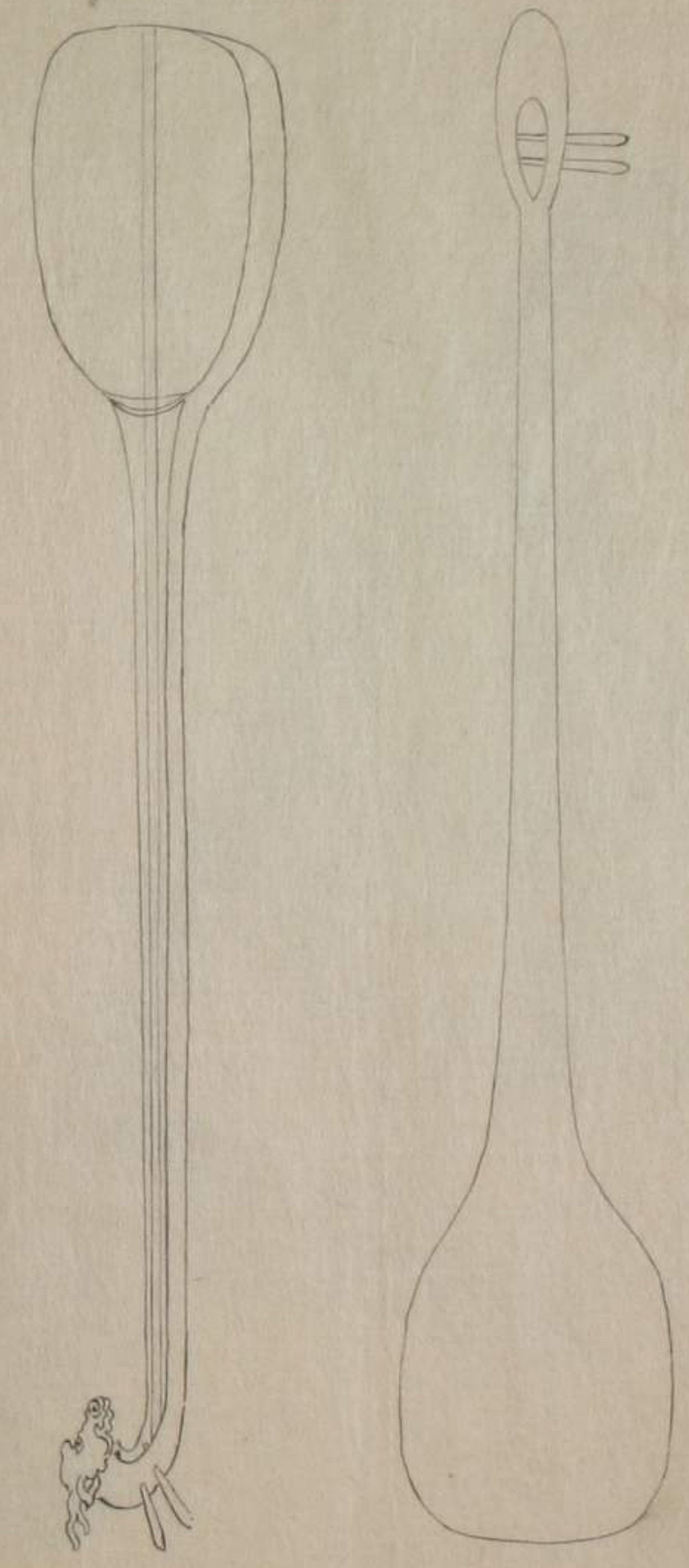
琉球製蛇皮線
 村内彦藏
 松屋三信考



古製三味線
 高類軌以軌二篇一名都津馬廻
 寛永十一年京都清水寺繪末三郎

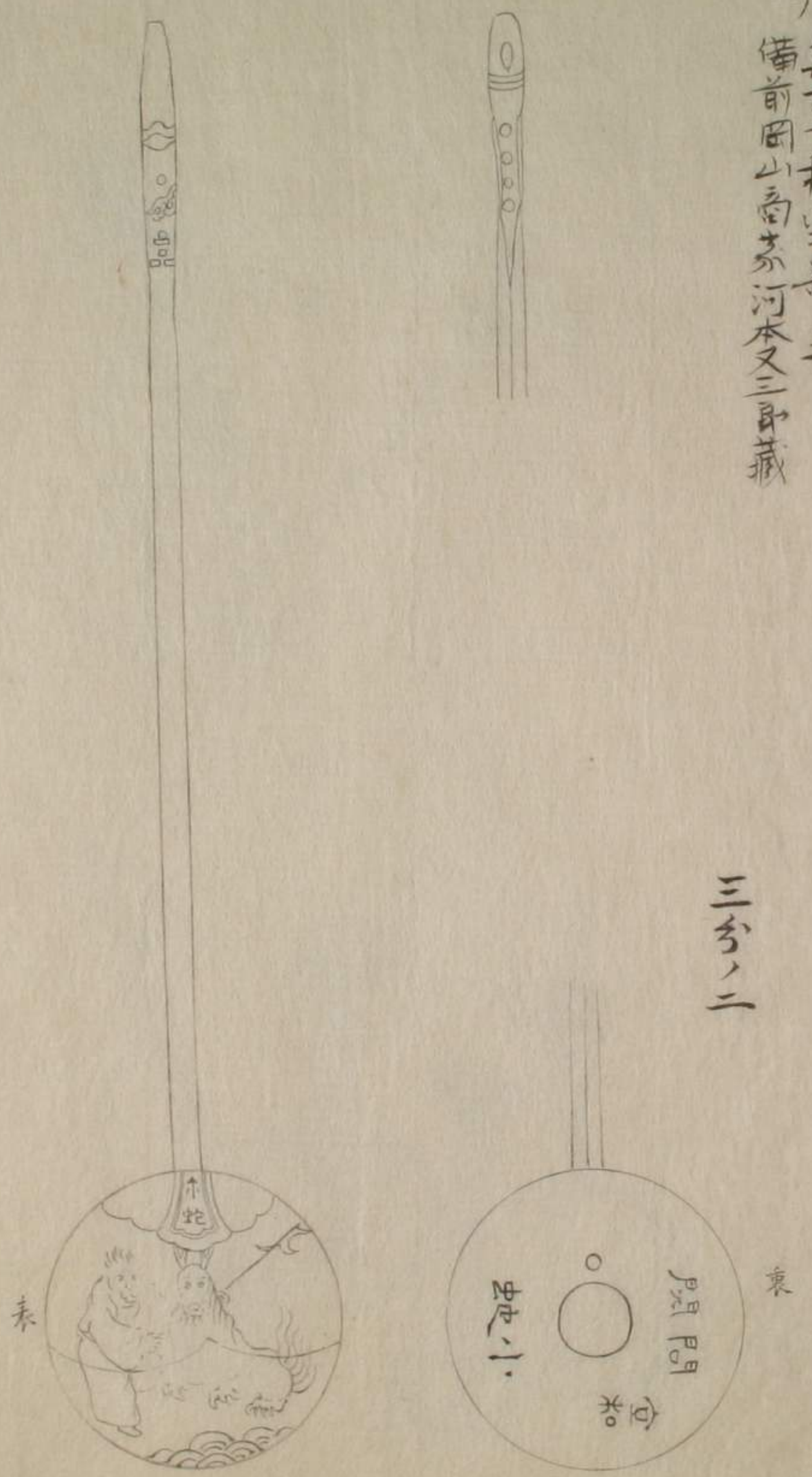


二弦
集古十種樂器三
山城妙覺寺藏



三ノ二

月琴
集古十種樂器五
備前岡山高家河本又三郎藏

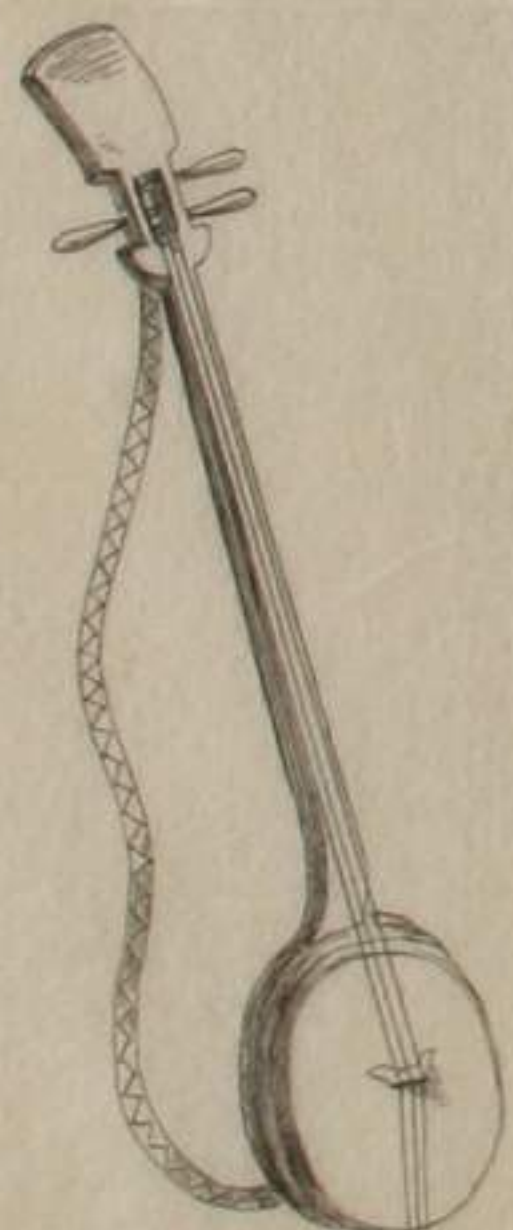
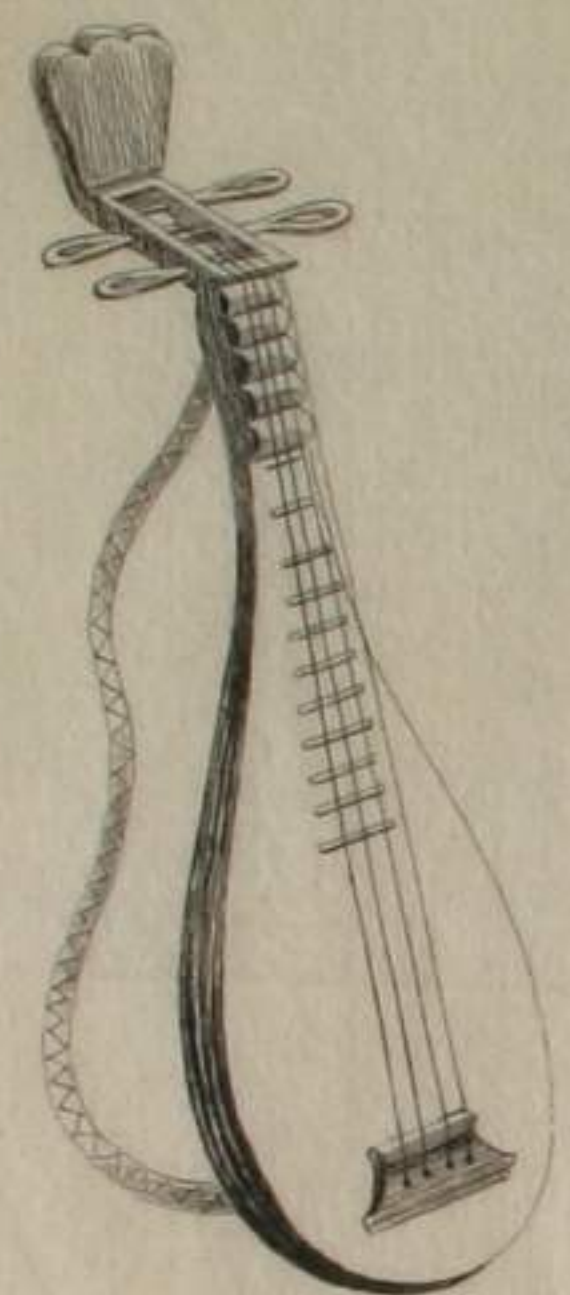


三ノ二

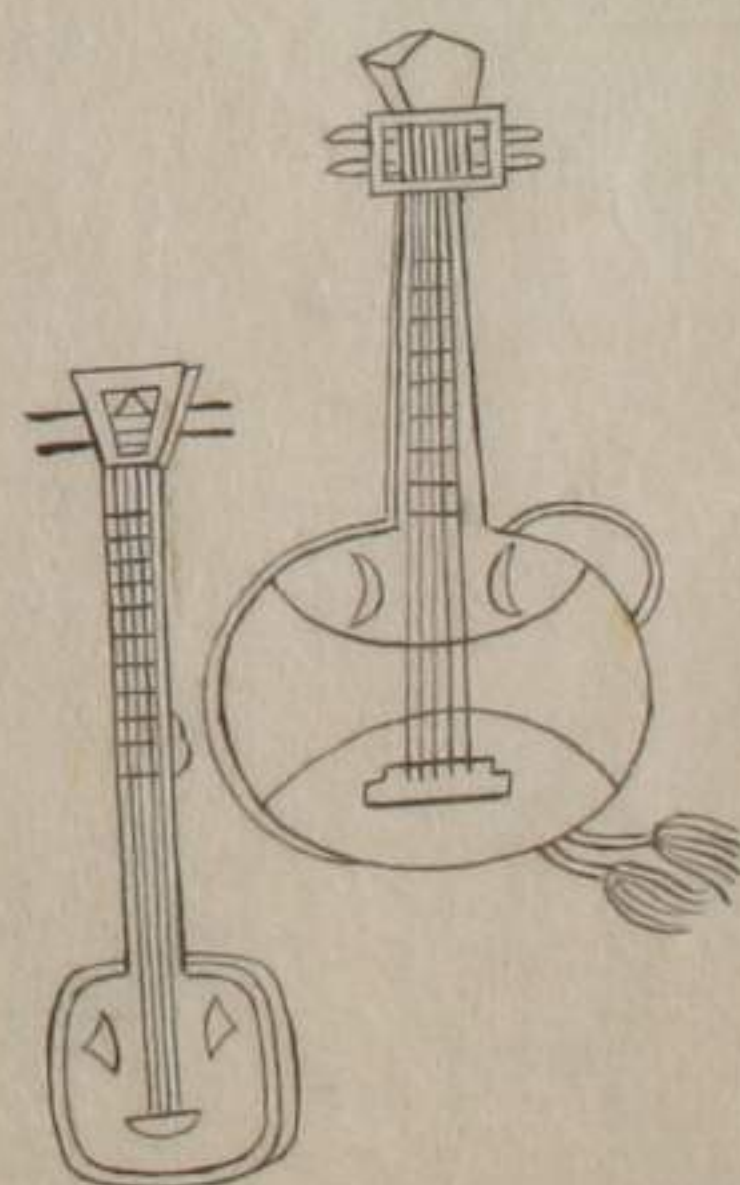
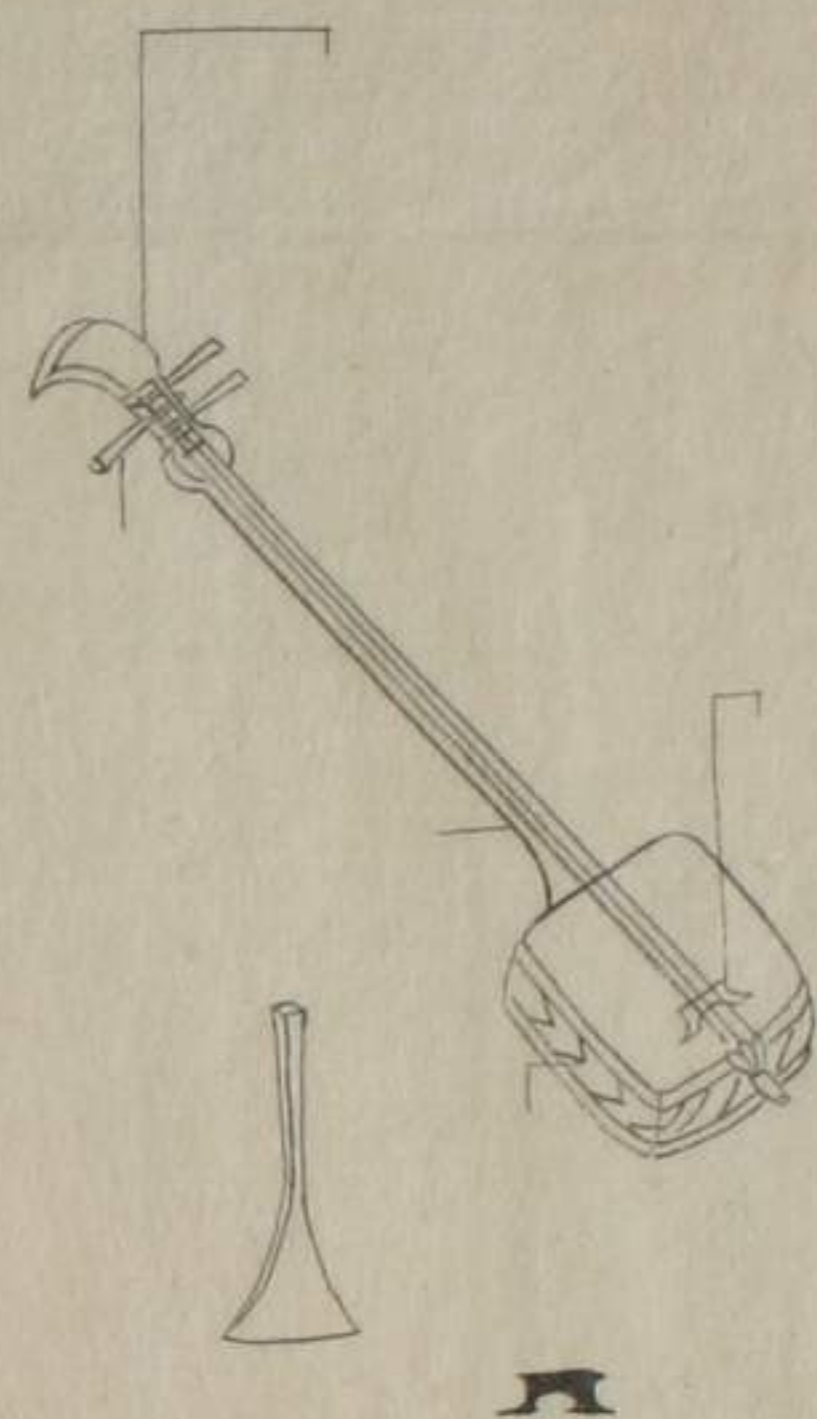
表

裏

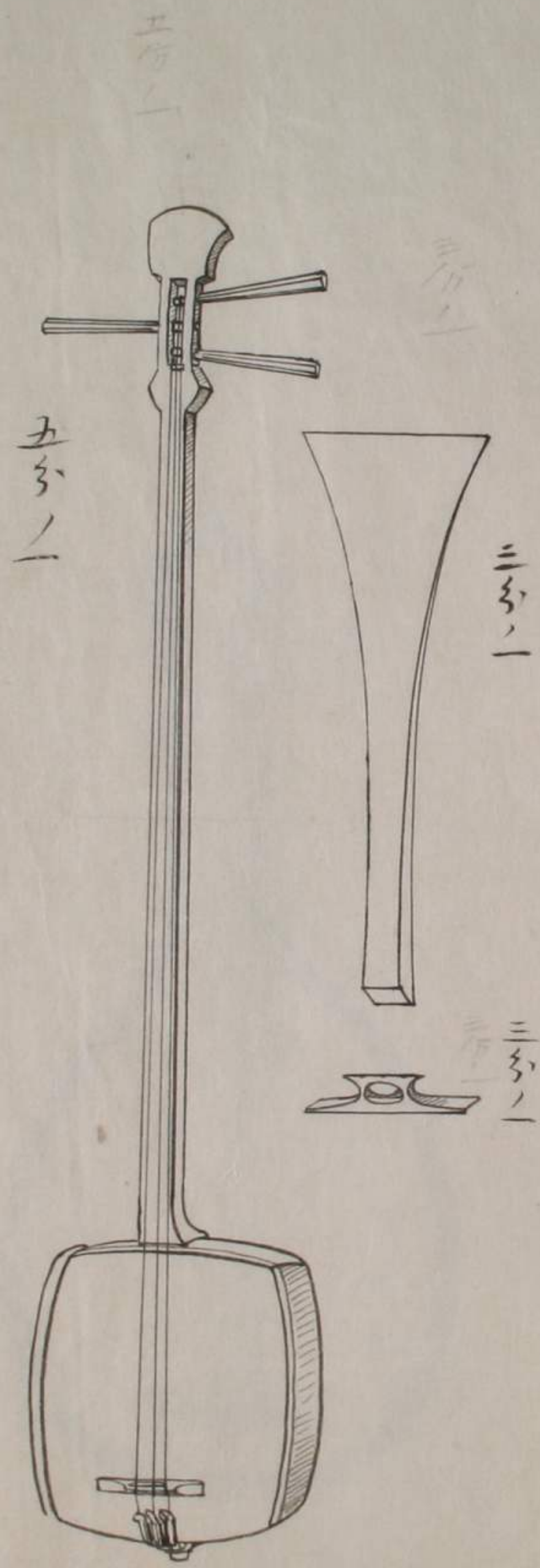
月琴
小蛇
可光



三線 和漢三才圖會

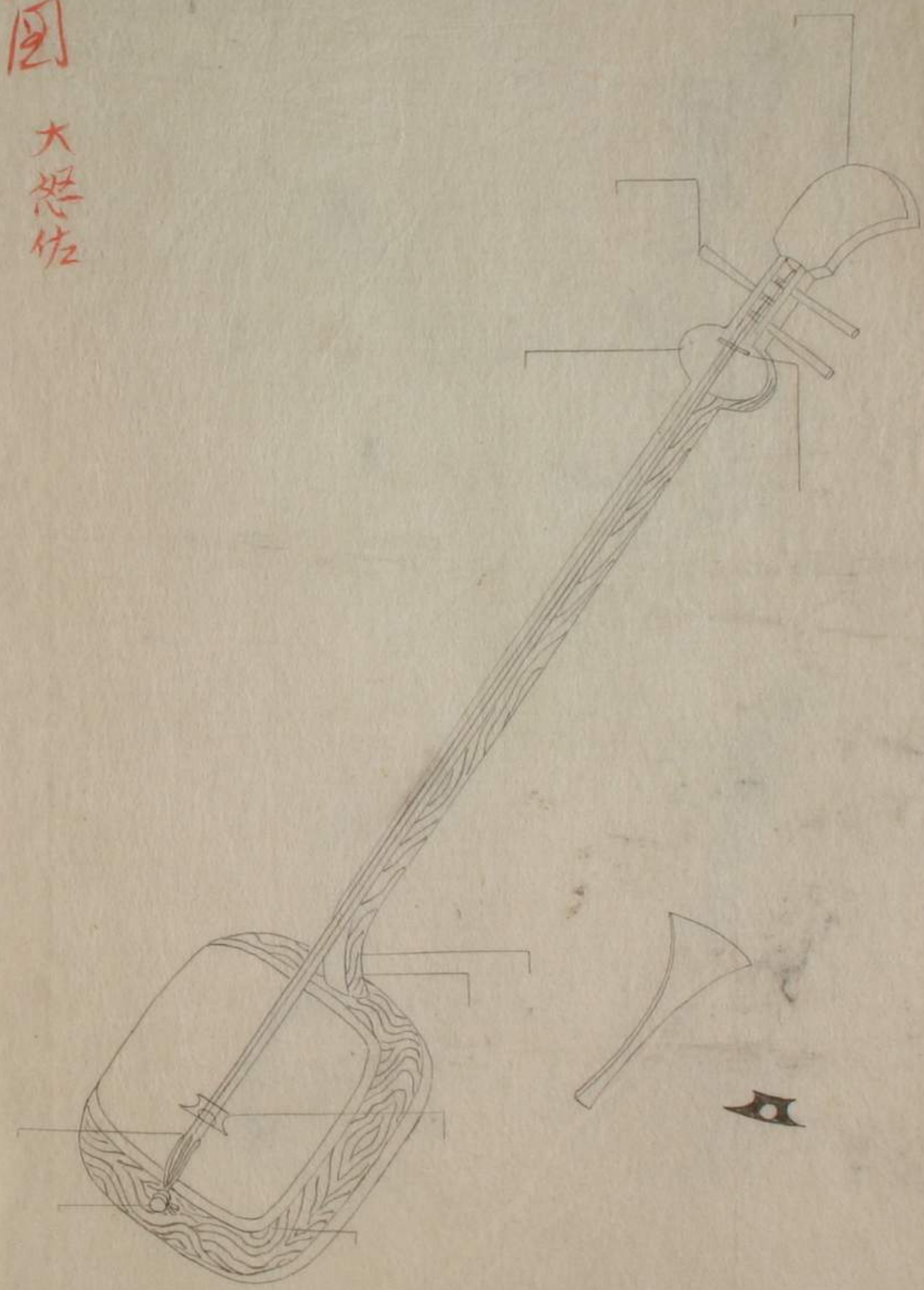


現時製三味線



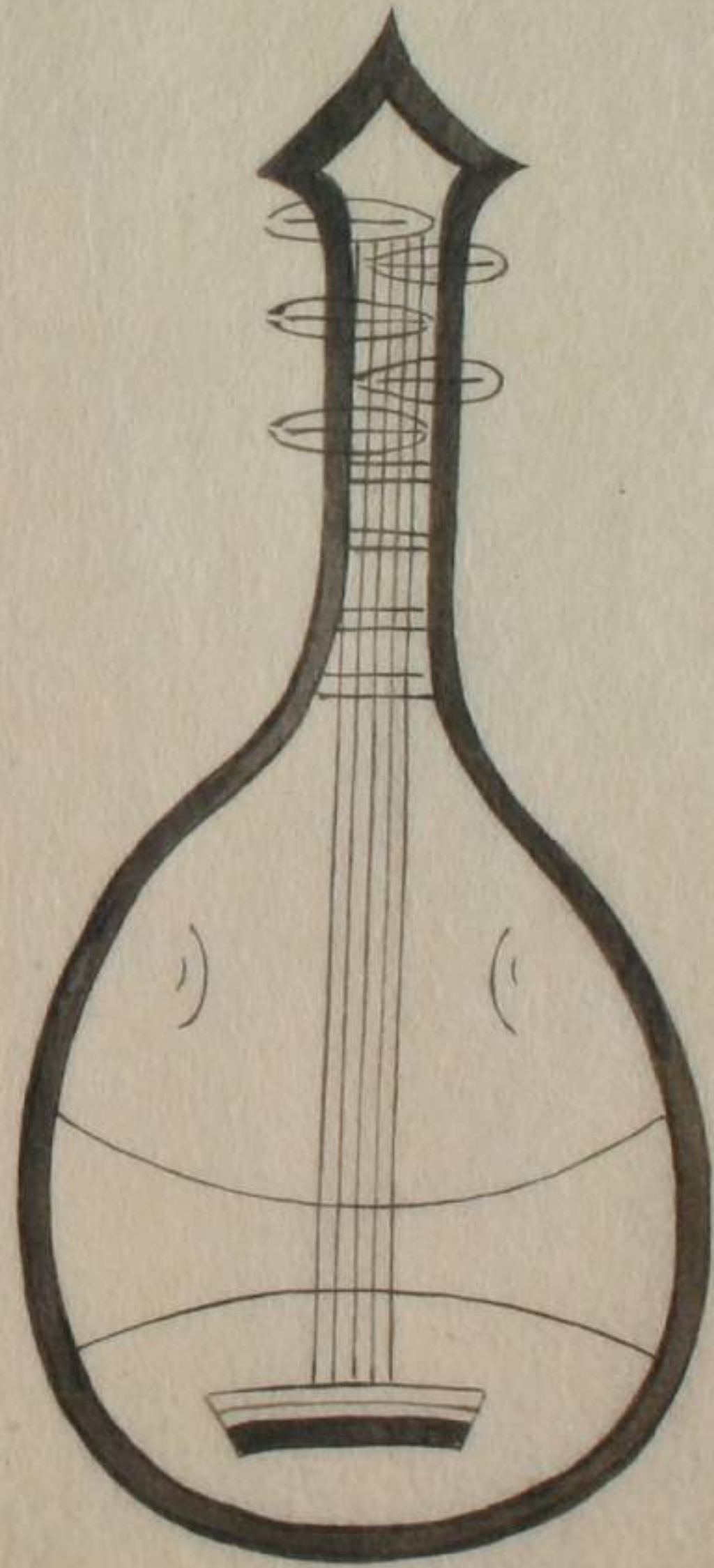
三弦圖

大惣佐

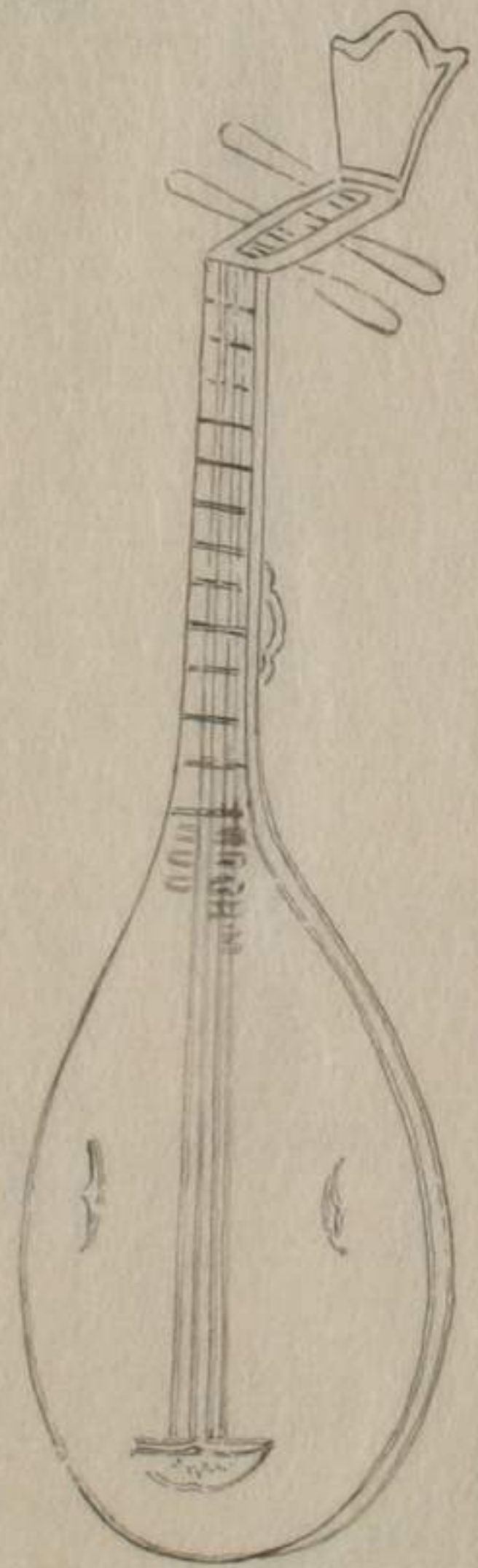


五弦

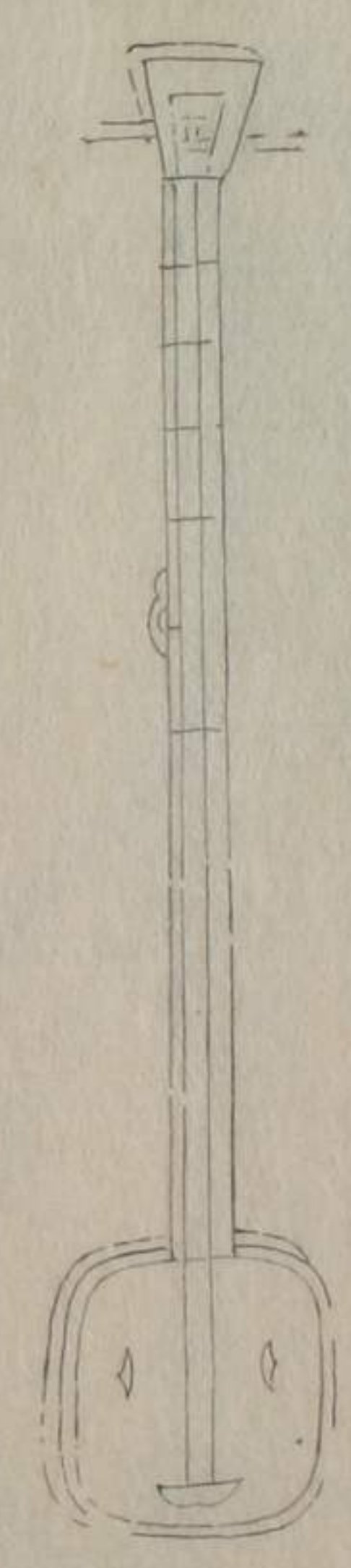
體源抄
八



阮咸琵琶
三才圖會

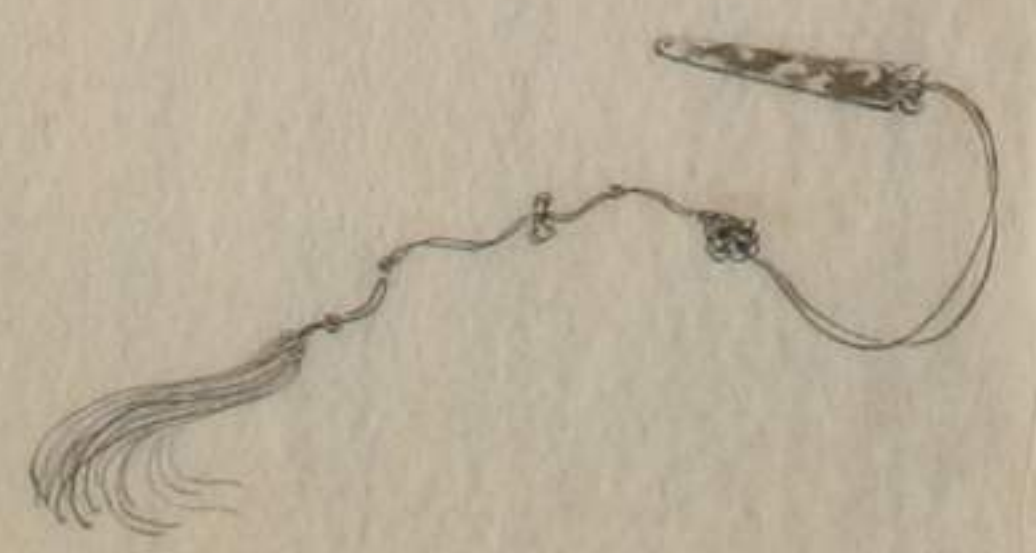
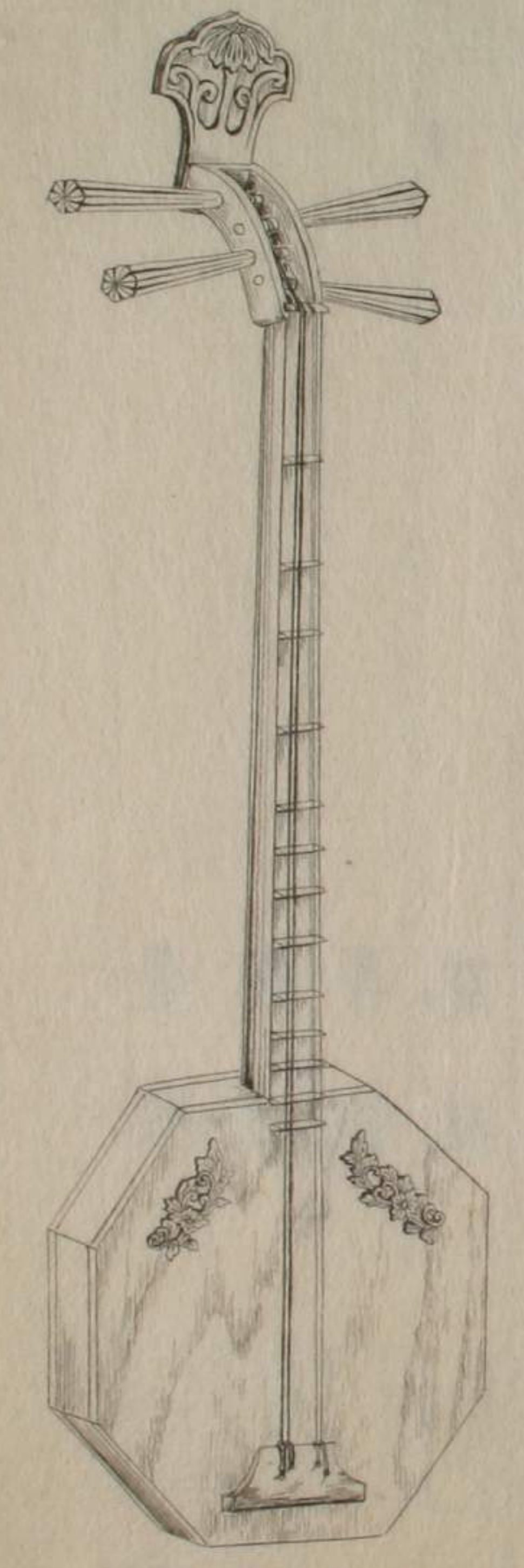


阮咸 三才圖會

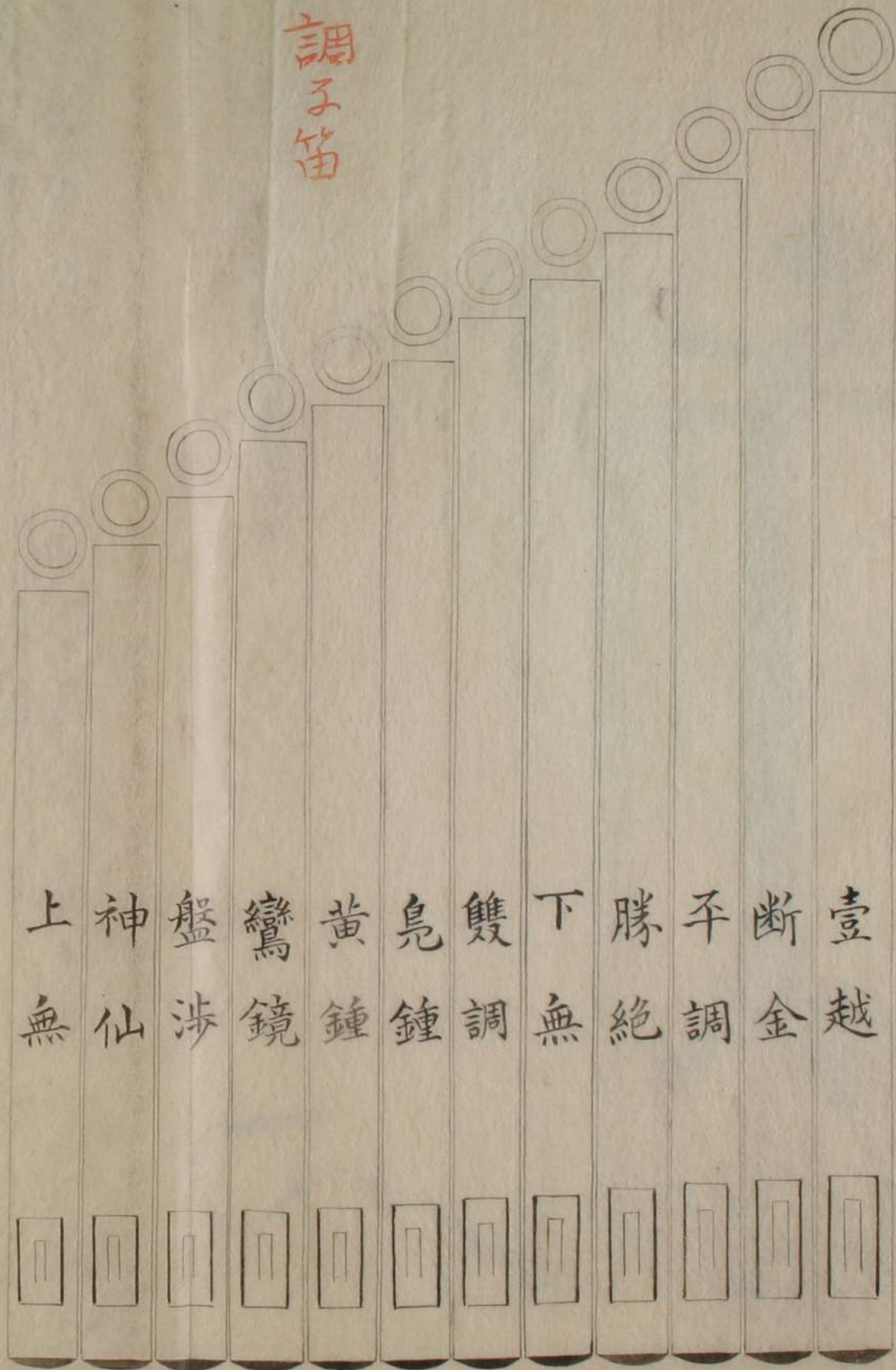


阮咸 現特明染清堂所用

五
分
一

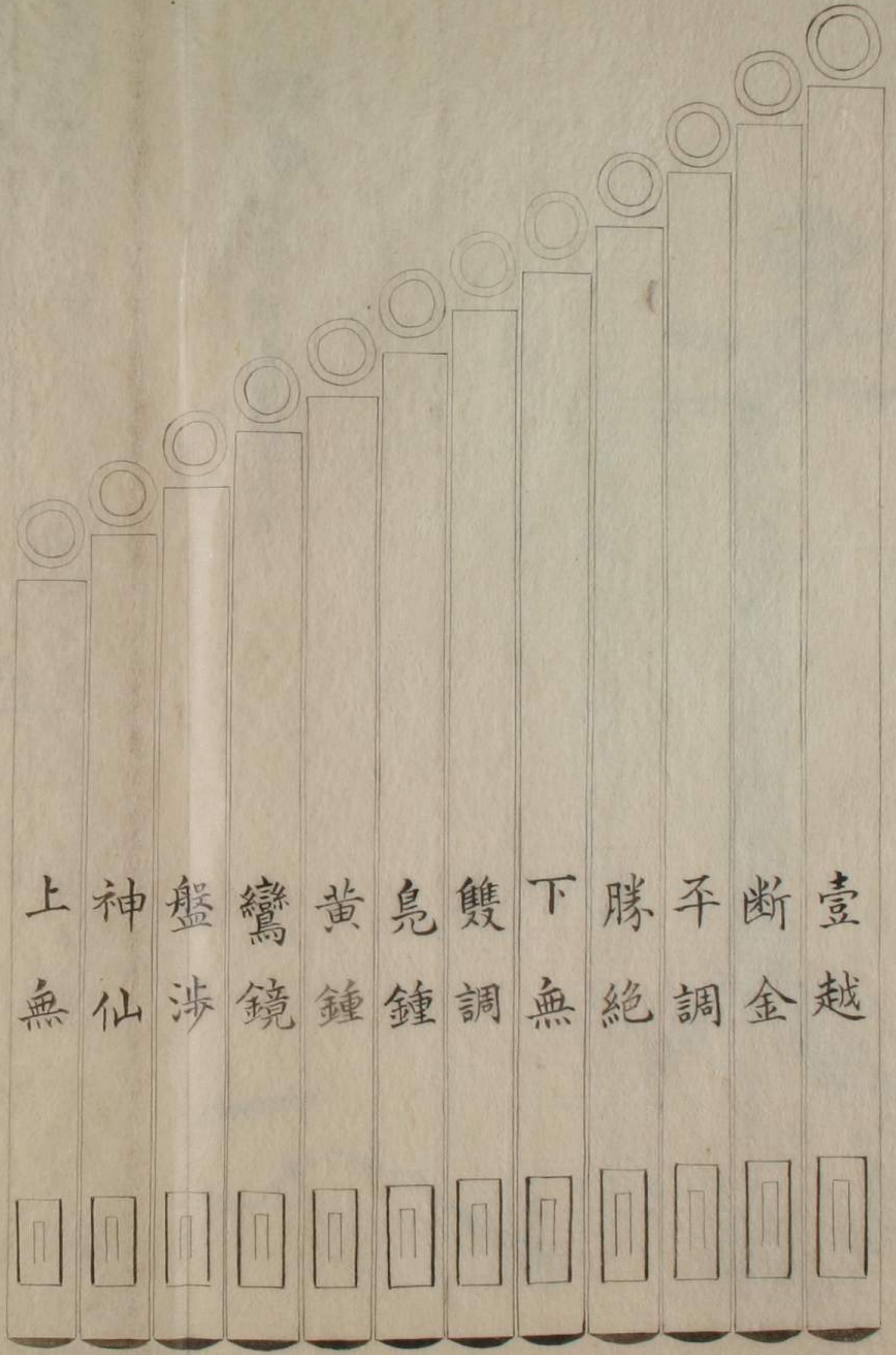


調子笛

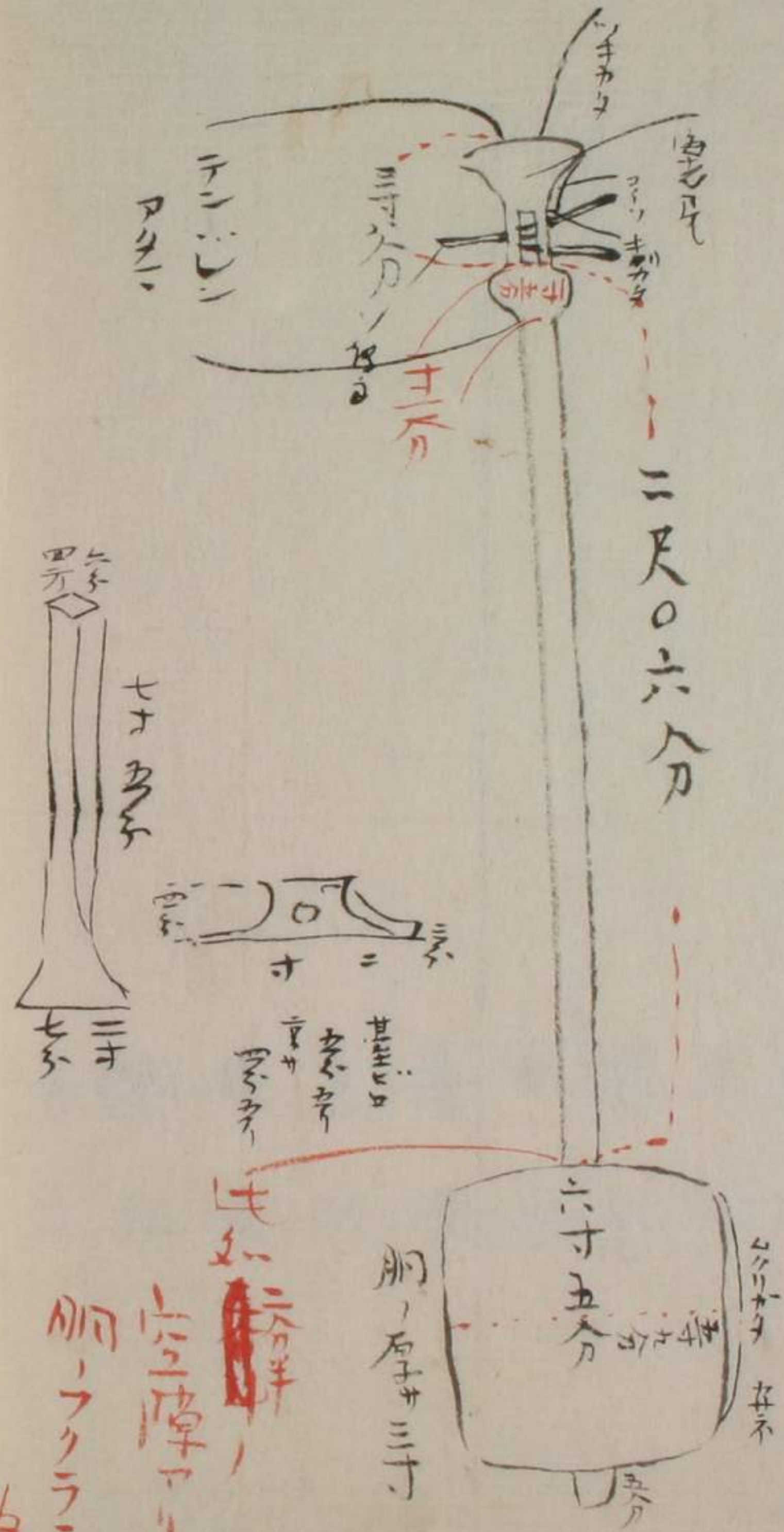
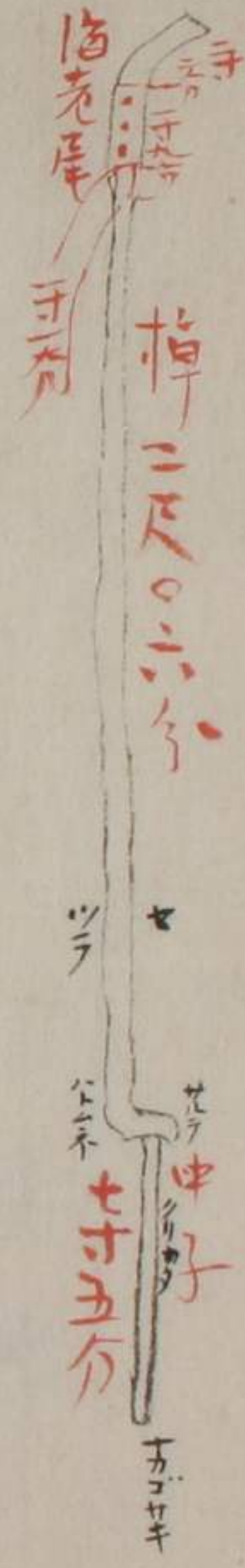


上無 神仙 盤涉 鸞鏡 黃鐘 鳧鐘 雙調 下無 勝絕 平調 斷金 壹越

盤山



三味線
現時製
寸法



○扁額軌靴西京祇園社近衛町中祇園祇園所園額ノ内三信古用
 ○篠竹初心集下三信彈法教授園 松屋三信考ニアルカ
 ○東海道名所池田分本 巻四巻六ニ三信古用三処 冒書上偏中
 ○集古十種余申書家并四信ツギヤラ
 ○印巻三信タムブラ

大槻文彦

明治十六年四月三十日

文部省編輯局勤務中

音楽取調掛兼勤申付けらる

明治十七年

文部省を免せらる

文部省御用掛を仰付けらる

編輯局兼音楽取調掛勤務を仰付けらる

明治十八年三月 三才編志脱稿

同年十月十七日

音楽取調所兼勤を免せらる

[Faint bleed-through text from the reverse side of the page]

此歌係遊不... 不... 不...

...

...

...

...

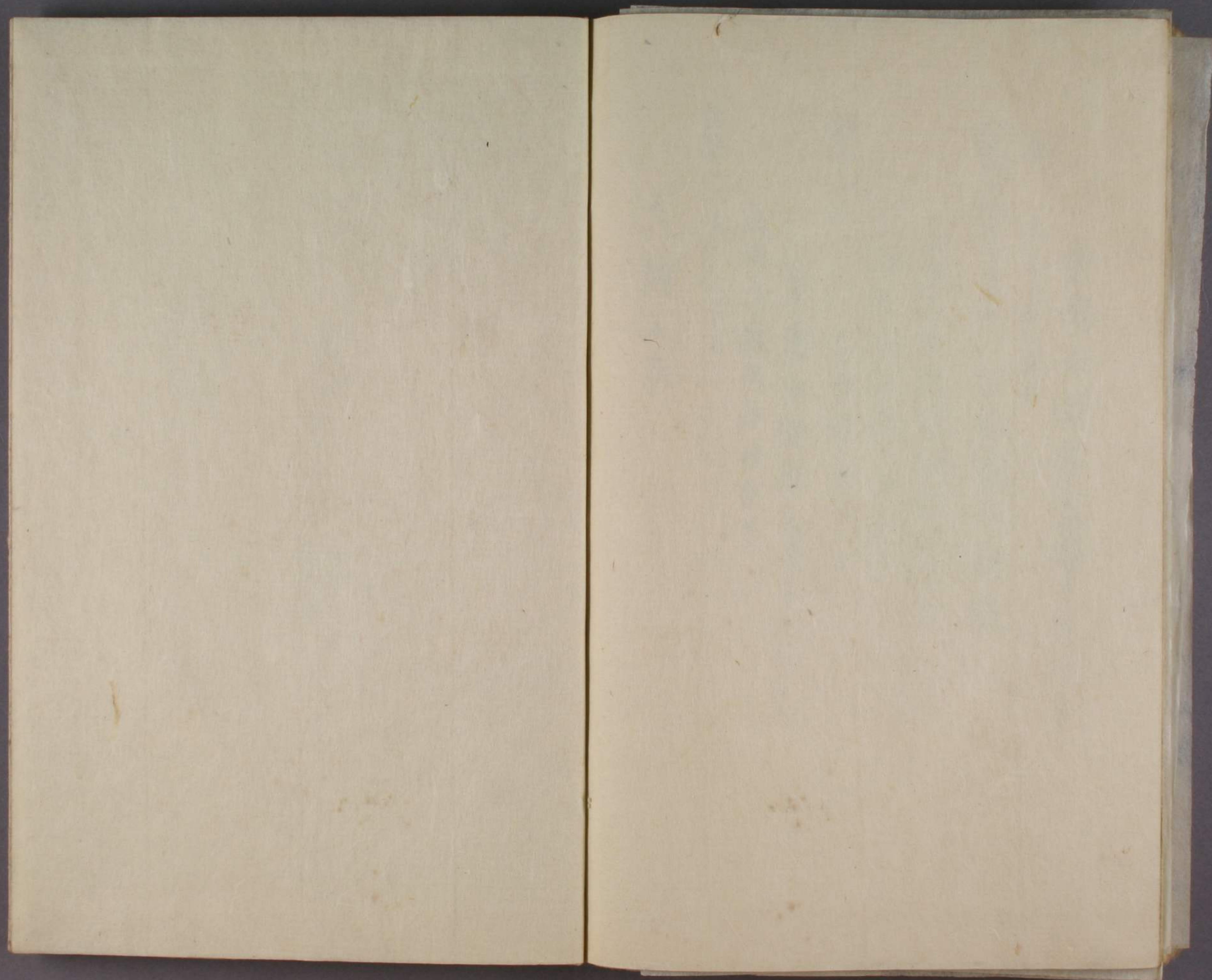
...

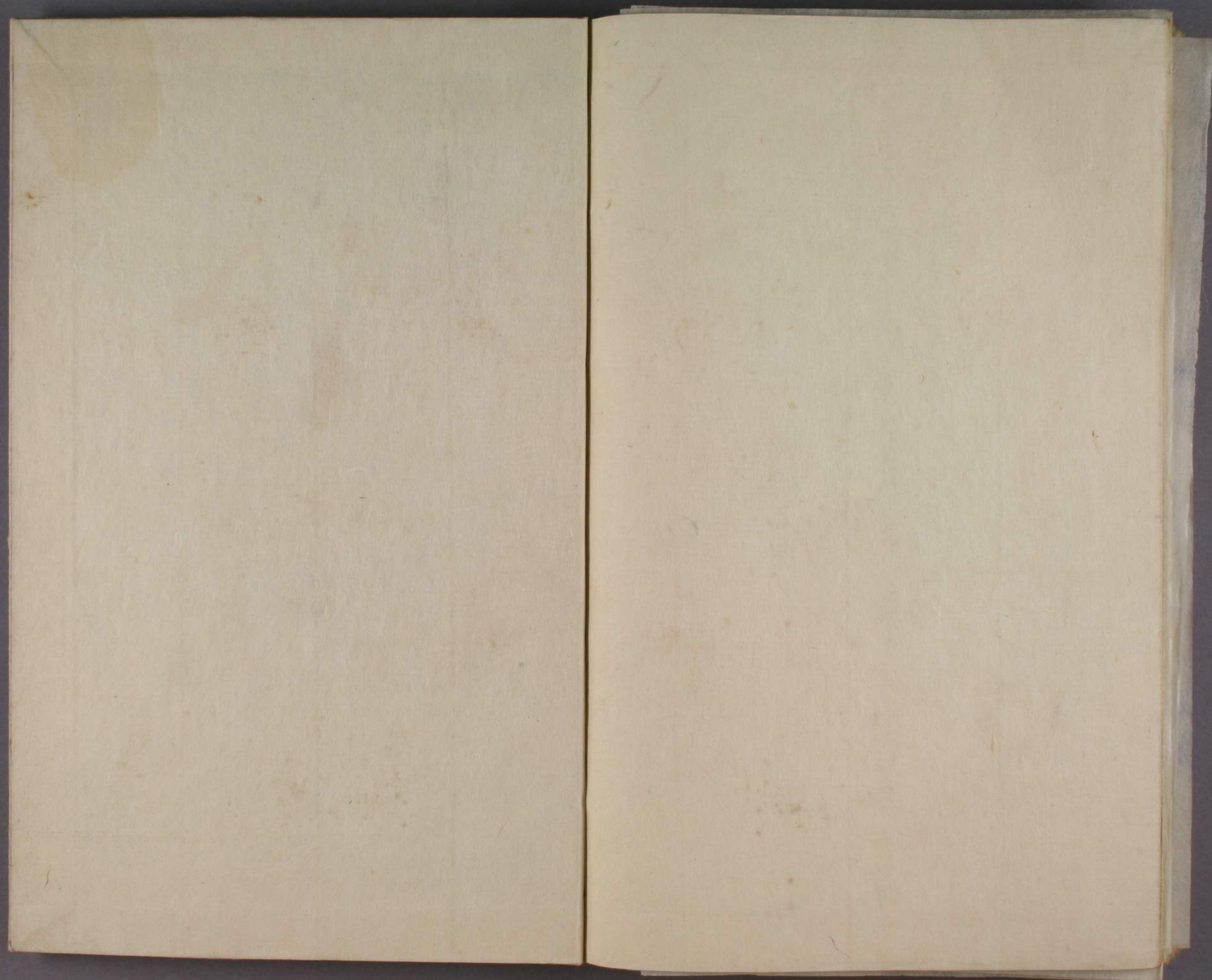
...

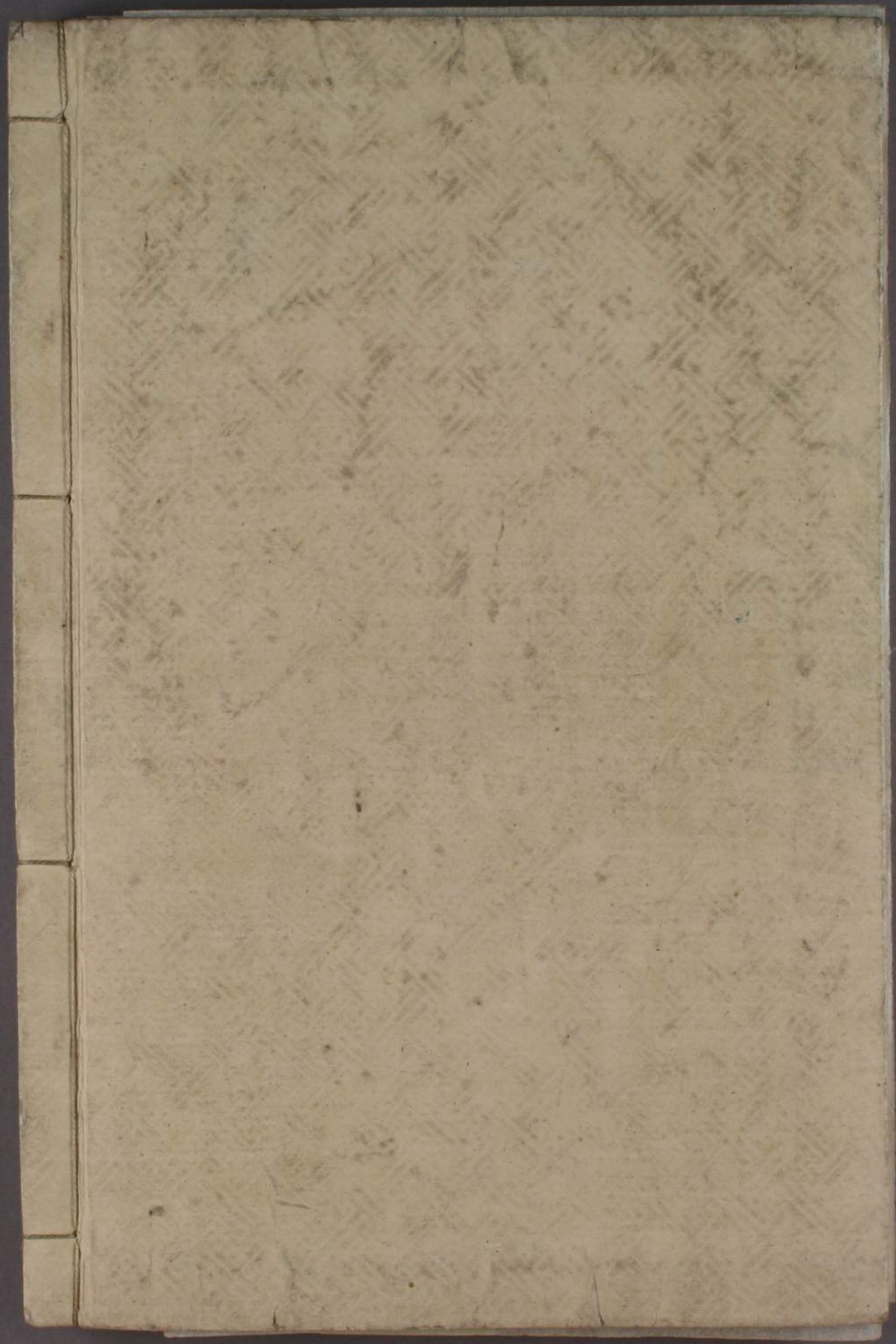
...

...

大抵以形







三味線志

附筠庭雜考抄書
大槻文彦自筆本
雜綴